

官民連携の持続的なまちづくりに向けて

九州におけるまちづくりの実践例と
まちづくり活動のポイント

平成23年 7月

国土交通省 九州地方整備局 建政部
都市・住宅整備課

はじめに

まちづくりの形は地域によって様々です。そして、社会経済情勢の変化、まちの変化、生活の変化に応じて求められるまちづくりも時代とともに変化していきます。

しかし、どのような地域、いかなる時代であっても、共通して必要となるまちづくりの視点が「官と民の連携」です。

まちづくりは、施設の整備やイベントの実施といったハード、ソフトの取り組みだけで完結するものではありません。

地域の個性を生かした、持続的なまちづくりのためには、行政だけでなく、地域の方々を巻き込んだ、息の長い、そして地に足のついたまちづくりを行っていく必要があります。

そこで、九州地方整備局では、九州各地でまちづくり（地域おこし）に直接取り組んでいる民間の方、アドバイザーとして関わっている方、行政の方など、それぞれの立場でまちづくりに携わっている方に、それぞれの活動の内容や工夫、課題等を伺わせて頂き、その結果を本冊子にまとめました。

それぞれの立場によって様々な意見がありますが、本冊子が、お互いの意見を尊重しつつ、多様な主体とうまく連携してまちづくりを進めていく上での一助となれば幸いです。

九州地方整備局 建政部 都市・住宅整備課

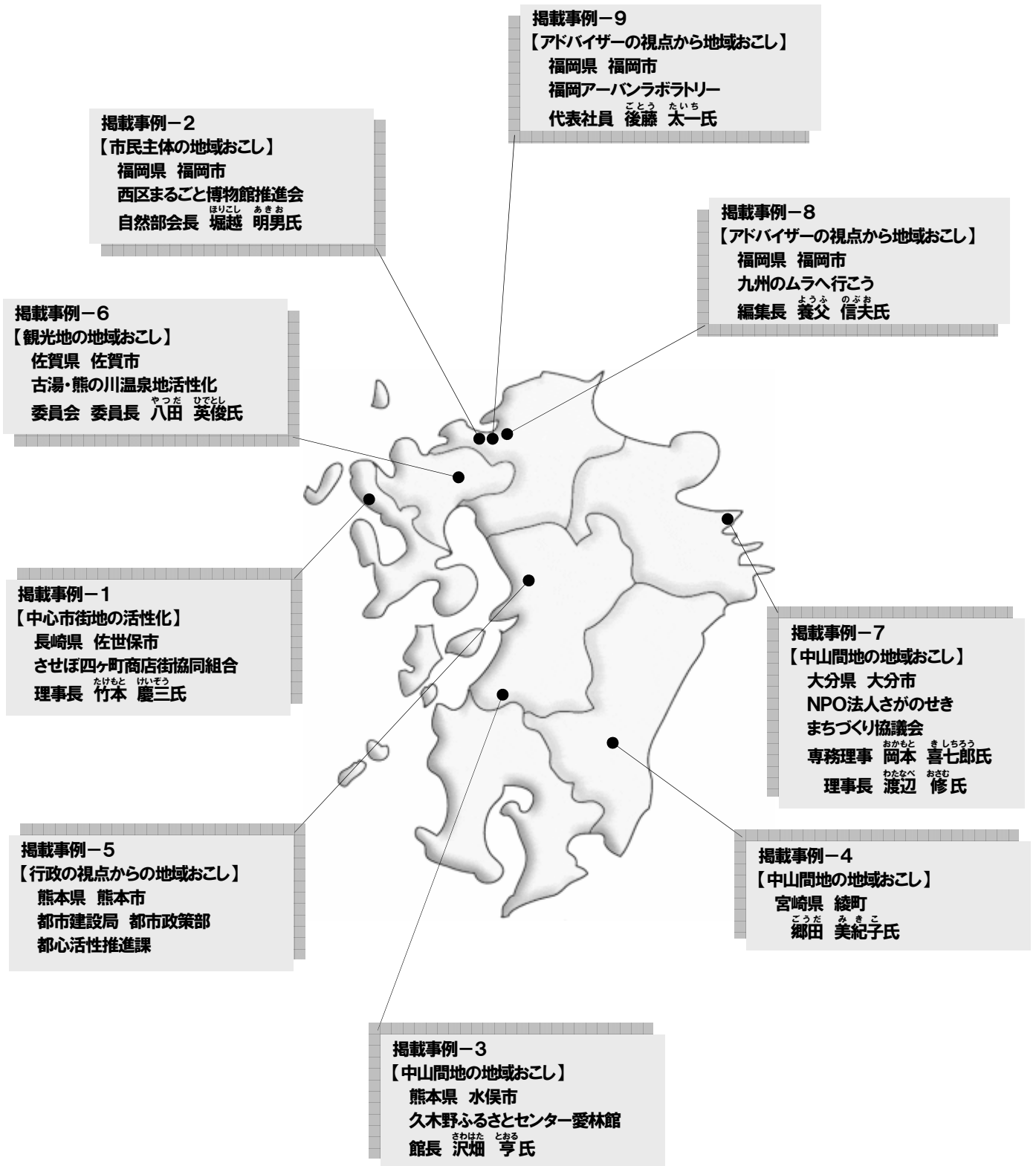
目次

掲載事例	3
① させぼ四ヶ町商店街協同組合 竹本慶三	4
② 西区まるごと博物館推進会 堀越明男	12
③ 久木野地域振興会 沢畑亨	19
④ 郷田薬局 薬剤師 郷田美紀子	27
⑤ 熊本市都市建設局都市政策部都心活性推進課	35
⑥ 古湯・熊の川温泉地活性化運営委員長 八田英俊	39
⑦ NPO 法人さかのせきまちづくり協議会 岡本喜七郎・渡辺修	47
⑧ 九州のムラへ行こう 養父信夫	55
⑨ 合同会社 福岡アバンポラトリ 後藤太一	63

※上記の方々へのインタビューは平成22年12月～平成23年1月にかけて実施しています。

※掲載の順番は、インタビューさせて頂いた順としております。

掲載事例



①させぼ四ヶ町商店街協同組合 **たけもとけいぞう** **竹本慶三 氏**



【竹本慶三氏プロフィール】

長崎県佐世保市生まれ（60歳）
させぼ四ヶ町商店街協同組合 理事長
佐世保市商店街連合会 会長
バッグショップタケモト代表取締役

【活動団体諸元】

団体名：させぼ四ヶ町商店街協同組合
組合員数：96名（内89名が店舗経営）
全体店舗数は120店程度

『連絡先』

させぼ四ヶ町商店街協同組合 事務局
〒857-0871 長崎県佐世保市本島4-15
TEL：0956-24-4411 FAX：0956-24-4412
E-mail：office@yonkacho.com

【インタビュー結果のポイント】

活動の概要

郊外への大規模店舗出店計画を契機に危機感を抱き、地域住民や市民の協力のもと、多くの個性的なイベントを開催し商店街の賑わいをもたらしている。今では「日本一元気な商店街」と評される。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 商店街の3つの役割のうち、重要なのはイベントなどにより人を集める賑わいづくり
注：商店街の3つの役割、「文化的な役割」「社会的な役割」「経済的な役割」
- 他のまちの事例（Yosakoi 祭りなど）で良いものはどんどん取り入れる

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 活動資金の不足などについて、様々なアイデアで活動資金を確保
（企業応援団、市民応援団の支援）

活動の効果、成果

- イベントなどを通じた市民との感動の共有により賑わいが創出

活動を持続的に行う秘訣

- イベントなどに市民を巻き込み関わらせることが重要
- 多くの人に参加しやすい推進体制の確立が重要
- 多様な人を受け入れることが重要（若者・ばか者・よそ者による会議の開催）
- 自分たちで率先して活動することが重要（自助、互助、公助の順番）
- 自分自身が活動を楽しむことが重要

今後の活動

- 現在の活動を継続して実施するとともに、リピーターが増えるような祭りを実施
- 商店街を元気にするよりも、佐世保市民を元気にすることが目標

建物（銀行跡）の有効利用

官民連携の課題と望むこと

- 事務処理等の煩雑さの解消と民間が利用しやすい支援制度の導入
- 道路使用などの許認可の弾力化

プロフィール

質問：組合の構成員は何人ですか？

竹本：96人です。その中でお店を持っているのが89人です。商店街全体では120店ですが、非組合員もいらっしゃいます。ナショナルチェーンやコンビニは組合に入りません。若い人たちの中には、組合に入って魅力があるのか、という人たちがかなりいらっしゃいます。

質問：それはほかの商店街でもよくお聞きしますね。若手でお店を出す人は組合に入らない、負担だけが増えるという言い方をされるようです。

竹本：それはありますね。だから、悩みはそこです。これから先の悩みになってきます。

質問：構成員の方の年代は？

竹本：若手は少なくなっています。私が青年部の会長していたときには約50名くらい青年部がいましたが今は10人台です。

活動状況

質問：今の活動はソフト系が多いですか？

竹本：そうですね。ハード系はアーケードぐらいですが、整備も返済も終わりました。あと10年はこれで大丈夫だと思います。新たな部分では、5年前に組合会館を購入しました。この建物を買ったおかげで、FM局や子育て支援の活動拠点（無料で使用できる部屋）を入れるなど、いろいろな展開が図れています。

質問：三ヶ町の商店街とは連携していますか？

竹本：連携しています。四ヶ町と三ヶ町が

一緒になるときは、させぼ中央商店街連合会という形です。これには玉屋さんも加わります。

質問：活動の中で商店街以外の地元の住民の方との関係はどのような状況ですか？

竹本：市民参加型ですから、我々がやるソフト自体がほとんど市民と一緒にやりましょうよという形です。そのような関係がこの15年の中で出来てきつつあります。

きっかけ・地域が抱えていた課題

質問：最初に活動を始めたきっかけは、中心市街地の低迷などですか？

竹本：低迷の前です。郊外に大型店が出てくることに対する危機感からです。黒船みたいなものです。

質問：実際に大型店が出店したあとは、その影響は大きかったですか？

竹本：大きいです。大型店は130億売っていますから、その分が取られています。南の方からのお客さんの関所になっています。それが現状です。

但しやらなかったら、ほかの町と一緒にようなシャッター通りになってしまったでしょうね。



軌道に乗るまでに要した期間

質問：活動を始めたときに、最初から皆さんの協力を得られましたか？

竹本：協力してくれたのはごく一部です。当時、私は商店街の売出しを担当していました。それまでの佐世保の町は、天然のコンパクトシティで、黙っていても食べられた町でした。その中で大型店という黒船が襲来してきて、どうするかということを考えていった。そこで、商店街の役割は何があるのかというと、1つ目がものの売り買いをするところという経済的役割、2つ目が人を集め、にぎやかさをつくる社会的役割、3つ目が情報を発信する文化的役割です。

その中で、大型店と売出しの部分で戦っても勝てないと考え、我々の得意である人を集めて、にぎわいをつくらうと考えました。

人はどういったところに集まるのか？人は人の集まる場所に集まります。人を集める一番簡単な方法は、それは祭り・イベントです。

但し、祭りやイベントをやっても、売上は増えません。でも大事なことは、そこに活力が出てくることです。どうしたら、市民の皆さんに喜んでもらえるかという活力がでてくる。

力を入れている内容、ポイント

質問：人を集めようという方向性は、皆さん同じ意見でしたか？

竹本：それしかないということです。対抗して売出しをしても勝てません。私は30代のときに、アメリカンフェスティバルという20万人ぐらい人を集めるイベントを16

年続けた自信があり、イベントをやろうと考えました。その時に、たまたま市にイベントの助成があり、その助成に加え四ヶ町、三ヶ町、玉屋が共同して資金を用意（合計600万円）し、郊外の大規模店舗と戦うイベントを実施することにしました。

イベントの中身は、みんなで話し合う中で、当時人気があった神戸のルミナリエを参考に子供や孫、おじいちゃん、おばあちゃんたちに、本物のイルミネーションを見せようかという発想になりました。それが「きらきらフェスティバル」です。佐世保は、もともとよそ者の町です。これも、とりあえず始めて、あとはそれを自分流にアレンジして、定着させ、オンリーワンのものにするようにアイデアを考えていきました。

資金面では、色々なアイデアを実行しようとする、600万の予算が1000万ぐらいになりました。その時に、我々は1000万を600万にするのではなく、600万を1000万にする方法として、宣伝広告を考えました。

それも、一般の宣伝広告ではなく、企業応援団として、企業によるまちの応援団ということで掲載をお願いしました。これにより、たくさんの企業が応援をしてくれまし



た。

もう1つが市民応援団です。「あなたの1000円でイルミネーションが2個つきます。市民応援団になってください」という活動です。これで大事なことは、市民を関与させることです。イベントは、「私もこのお祭りに関わっている」「私のイルミネーションがどこかに2個ついている」という思いが大切です。こういうことを市民応援団という形で仕掛けています。

質問：市民を巻き込もうという発想は最初からありましたか？

竹本：いや、やっている中から生まれました。

それと、イルミネーションもつけるだけでなく、点灯式から始まって、ずっといろんなイベントを毎週やっています。例えば、「きらきらチャリティ大パーティー」という1キロのアーケードを使って、場所だけを提供し全部持ち込みでパーティーを行うイベントも行っています。

あとは「きらきらウェディング」や「バトルジャム」「サンタクロース大集合」「ジャズライブ」「市民で歌う歓びの歌」「キャンドルを灯そう」「サンタプレゼント」「クリスマス佐世保に雪が降る」など、次々

とやっています。

質問：「定期的ないつもここに行ったら何かやっている」、それで市民をどんどん巻き込んでいく、そこがポイントですね。

あと、活動の中で大事なことは？

竹本：続けるということが大事です。この大きな要因が会議のやり方です。普通、昼間に会議をやるといってもなかなか出てこられない。それで朝会議という形を考えました。朝7時に1000円持ってホテルに集まり、朝食バイキングを食べながら会議をやる。7時からやって9時に終われば、自分の店のシャッターを開けることができます。あくまでも自主的に朝7時に集まろうという会議です。これが非常に前向きで自分たちの作った会議で面白かった。

質問：どれくらいの人数が集まりますか？

竹本：20~30人は集まっています。第1回目が大成功になった大きな要因はそこにあるでしょう。

その会議でお願いしたのは、できないということを使うのはよそうということです。どうしたらできるかを考える会議にしようじゃないかと。そのために商店街という枠を外し、出来る人に参加してもらう「来る人拒まずの会議」としました。それが非常に前向きでよかった。終わってしばらく経ったときに、若手が「竹本さん、朝会議が面白かったです。また、やりましょう」と言ってきました。「夢がかなうじゃないですか。だったら、もう1回みんな夢を語りましょうよ。非常にあの会議は面白かったから」と言って。それで始めたのが「若者、ばか者、よそ者、夢会議」です。若者の情熱、ばか者の一途さ、よそ者のアイデアということです。

それで会議をやっていくうちに、いろん



な夢をみんなが語っていった。

その朝会議の中でいろんなアイデアが出て、その中の1つが「YOSAKOI させぼ祭り」です。

北海道の祭りのビデオを見て、「ああ、すごいね、この祭りは」ということで、自腹で北海道の YOSAKOI を視察に行きました。それで、こういう祭りを佐世保でやりたいね、こういう祭りを佐世保の皆さんに見せたいねということが始まったのがきっかけです。それも今年が13回目で165チーム、7000名の踊り子となり、もう定着しました。



質問：Yosakoi させぼ祭りは広い範囲に会場がありますね。商店街にとどまっていなという感じですね。

竹本：最初は商店街という「街づくり」でした。途中から、ひらがなの「まちづくり」になっていった。市民参加になってきた段階で、街を元気にする、佐世保を元気にする、佐世保市民の皆さんと一緒にやっていく、市民の皆さんの幸せを考えることが、「まちづくり」だという発想になってきたわけです。根っこは、自分の店が大切です

が、佐世保を元気にしたら、ひいてはうちの店に帰って来るじゃないかという発想です。

うちでは、これをシャッター通りにならないうちに仕掛けていったから、まだよかった。10年かけて、だめになった町が、1回や2回のイベントで良くなるはずはありません。うちはまだ元気なうちにこうやって仕掛けていったから、今も続けていけています。

イベントで大事なものは人づくりです。人が、イベントのおかげでできていきます。だから、まちづくりイコール、まちの人づくりです。

質問：イベントの関係者は、殆どが自分でお店をしていますよね。イベントに掛かりきりになると、自分の店の方が大変なんじゃないですか？

竹本：大変ですね。それでもやっぱり人を集めることが、自分の店の儲けにもつながると私は考えていますから続けています。ただ、みんながそう思っているかという、なかなかそこまではなっていません。やっているうちに少しずつわかってくる。だから、できるだけそれをわかってくれるような人間を引っ張っていくしかない。

あとは市民を巻き込むことです。商店街に若手が少なくなっているのはどうしようもない。だけど一般の人たちで、街中で何かをしたいと思っている人たちがたくさんいる。そういう人たちが活動できるチャンスをつくる。だから、NPO団体から一緒に何かやりましょうと言われたら、「どうぞ、どうぞ。場所をお貸ししますよ。やってくださいよ」と協力しています。



失敗や失敗を克服した方法

質問：活動の中で、継続の危機はありましたか？

竹本：ありました。活動は私1人ではできないわけで、最初仕掛けるときは4、5人仲間がいました。それが色々な事情で参加できなくなる。そのことが一番きつかったです。当然、後継の若手は育てていますが、やっぱり一番相談して一緒にやってきた仲間がいなくなるのはきついです。

質問：商店の方で、息子さんが帰って商売するなどの動きはありますか？

竹本：一部ではあります。でも昔に比べたら少なくなりました。不動産業に変わっている人が結構います。店を賃貸にして人に貸すと商店街への思いが、変わってきます。本当はその人たちが一生懸命協力しなければいけません。景気の波はその人たちが一番影響を受ける。ところが本人たちは自分たちが廃業したという弱みがあるから、活動に出てこない。本当は彼らが一番時間があるからやらないといけないと思います。

活動の効果、成果

質問：大規模店が来るとわかった時点で、いろんなイベントをやり始めたが、売り上げは下がっていったということでした。それはまた上がりましたか？

竹本：上がりはしていません。横ばいぐらいです。今は大規模店は出てこないけど、郊外はますます中型の専門店がどんどん増えている。

あと、消費する人口が減っているのどうしようもないですね。

質問：逆に今の時代だと、売上が変わらないというのがすごいと思いますが？

竹本：人がこれだけ通ってくれるというのが一番ありがたいことです。一度人が通らなくなったら、それから回復させるというのは大変です。卵が先か、鶏が先かという話でしょうけれども、人が来なくなったら大変です。

持続的に行う秘訣

質問：先ほどお聞きした会議のやり方の他に、活動を持続する秘訣はありますか？

竹本：一番は楽しむことです。自分が楽しまないと誰もついてこない。だから今、私は基本的に「出会い、そして感動」というキーワードで動いています。出会いを大切にしていってあげて、あくまでも心を動かす感動でなければだめだということです。

お金でつながっていたら、それで終わるけど、心でつながっていれば続いていく。

上杉鷹山の言葉で「心の火種を残そう」ということばがあります。火が落ちた灰の中にも火種は残っている。その火種に息を吹きかけて新たな炭に移していこうということです。まちづくりは全部つながっている。心がつながってきたら、それはつながっていくと思います。

あとは行政がやることと、地域がやることと、個人、これがばらばらではだめです。あくまでも三位一体になって、同じ方向を見ていくことが必要です。それが「自助、互助、公助」。

まず自分の力でやれることは自分でやるのが大事です。



課題、困っている内容

質問：今の課題は何ですか？

竹本：駐車場の問題が一番ありますが、それはどうしようもない。それより、もっと公共交通機関を使ってもらえる方法を考えています。うちの場合は公共交通機関でバスがすごく多く、ちょっとした町の地下鉄並みに、次から次にバスが来ます。だから、駐車場がなくてもそれ以上に魅力があるまちづくりをしていったら、お客さんは来てくれるはずです。

今後の活動

質問：今後は今の活動を基本的に続けていきますか？

竹本：そう、この活動をずっと続けていきます。

あと今は商店街にある銀行跡の活用の問題、これがこの1年間すごく大変です。80年の歴史があり愛着があるから、建物を有効利用して残すべきだと考えました。

質問：人が集まる施設として、街中にもってきたいということですね。

竹本：そうです。今は駅にしかない観光コンベンション施設や観光案内所、コミュニティーカフェ、大学のサテライト研究所などを入れることを考えています。

官民の連携

質問：行政になにか望むことがありますか？

竹本：以前にうちでは国の補助金を使ってうんざりしたことがありました。

質問：それはなぜですか？

竹本：イベントでは急に必要な物を買ってくることがあります。国の補助金を使うと国はそれにも見積、発注書、納品書、請求書等が必要だと言ってくる。そこまで必要なのか疑問に思いました。事務局員が2～3名のところは、事務量が増加し大変である。イベント等の発注のとき業者の技術・信用度を重視して予算はこれしかないから最大限の効果発揮してください。最初は利益が出なくても何年か先には必ずプラスになるからとして結果として予算以上の良い仕事をしてもらっていたが、入札・見積もり・発注等厳しく指導される。先行投資は誰がしたのかということです。これは、いろんなイベントを行っている所が悩んでいます。

質問：市とやりとりをされるときは、市の窓口は1本に絞ってお話をされるのですか？

竹本：そうですね。そういうことも一生懸命考えてくれています。

質問：基本的に県・市との連携は許認可と補助ですか？

竹本：補助は「使ってください」という形が多いです。うちは逆に自分でしたいやつは使う。あくまでも「自助、互助、公助」で、自分がやりたいことでないと、いいことが出来ません。

質問：行政との許認可関係でこうなったらいいなという意見はありませんか？イベントなどで道路を使用をするときにも問題はないですか？

竹本：国道35号線はYOSAKOIパレードをやっていましたが、これは警察が嫌がってや



めてくれという話がありました。いっぺん手放したら二度と出来ないと思いましたがあきらめました。

質問：パーティーの飲食などは、例えば保健所などは全然関係ありませんか？

竹本：無いですね。市道ですから一番は警察です。よく許可したと思います。役所は許可しても警察は許可しないということもよくあります。特に明石の花火の事故以来、こういうイベントは大変です。

だから、当然ですけど、いろいろ言われます。でも15年やっていて、事故は1回も起こしていません。当然、起こしたら、もう終わりと思っていますから。

質問：今日は長い時間ありがとうございました。



②西区まるごと博物館推進会 **ほりこしあきお 堀越明男 氏**



【堀越明男氏プロフィール】

神奈川県横浜市生まれ（67歳）
西区まるごと博物館自然部会代表
仕事で全国を転々とした後、定年後の定住先として福岡市に移住

【活動団体諸元】

団体名：西区まるごと博物館推進会
組合員数：50名程度（当初27名）平均年齢は概ね60代（一部大学生も所属）定年後の方が多い
その他：平成16年から会員を募集し、平成17年から活動を開始

『連絡先』

西区まるごと博物館推進会 事務局
〒857-0871 福岡市西区内浜1-4-1（西区役所企画振興課内）
TEL：092-895-7032 FAX：092-882-2137

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

地域の宝をもっと多くの人に発信し紹介することで、地域の魅力を高め、地域への愛着を醸成し、地域の活性化へ寄与する活動を、市民と行政の協働で実施している。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 地域の宝の「掘り起こし」「情報発信」「周知のためのイベント活動」が主要な活動
- イベント参加者と一緒に動き、イベントを楽しんでもらう中で西区の宝の普及
- ツアーイベント参加者への感動の提供
- 年金生活者への喜びの場の提供

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 自由に活動できず来なくなる人もいた。会員が自由に楽しんで参加できるような役割分担のマネジメントが必要

活動の効果、成果

- ツアーイベント参加者の生の感謝の声も多くリピーターも増加
- 西区の宝の知名度も上がり、徐々に地域に浸透
- 1つの活動での人の繋がりが次の活動に繋がる循環を形成
- 九大生との交流

活動を持続的に行う秘訣

- 会員同士で年齢差などの多様性を許容することが重要
- 会員自身が活動を楽しむことが重要。またある程度のいい加減さも必要
- 会員がやりたいことを自由に行い、行政はこのバックアップを行うような体制が大事

今後の活動

- 現在の活動を継続して実施するとともに、徐々にイベントなどの内容を充実
- ホームページの作成など情報発信を充実
- 広告や募金活動などにより自主財源を確保

官民連携の課題と望むこと

- 今後も継続した活動費用、人的な面での支援
- 所管課の壁を越えた支援体制

プロフィール

**質問：プロフィールを簡単にお聞きします。
住所は、福岡市の西区ですね。**

堀越：はい。もともとは関東の横浜生まれで東京育ちです。大学までは東京でした。会社に入ってから転勤で全国を転々し、ここが気に入って、ここに住んだということです。ここを選んだのは、まず自然と人がいいことです。食べ物もいいけど、環境がよかったです。環境がいいのは地元の人には知らないのではないかと思います。

**質問：外から入ってみて初めてわかること
ですか？**

堀越：定年後はここに住みたいという気持ちは、客観的に転勤者のほうがわかると思います。地元の人には当たり前のように思っているようです。このいいものを皆さんあまり知らないということ自体が不思議だな思いました。だから地元の人よりも逆に愛着心が出たところがあります。

質問：組織の構成員はどのくらいいらっしゃいますか？

年代構成等も教えてください。

堀越：構成員の数は、当初は20数名で、今は50名ぐらいです。年代は、当初は平均で60を超えていましたが、今は九大生などが入り若干若くなっています。それでもあまり変わらないと思います。職業は現役の人のほうが少ないです。

活動状況

質問：現在はどのような活動をされていますか？

堀越：市民参加型のイベントをいろいろや

っています。その中で、私は自然部会の代表をしています。

イベントは、各部会で実施するものと、共通で実施するものを年1回行っています。共通のものは、宝の募集や活動を紹介するイベントなどです。この活動では、地元の自治会などと連携して実施しています。部会毎の活動は、来年度は自然部会では自然の宝の案内や紹介、自然の中で楽しむイベント、研修などを考えています。

これらの活動は、一度にやり始めたのではなく、最初は全体でやることから始め、それを成功させたら、次は自分たちの部会の中で活動を始め、その中で効果が上がり、他との連携が出てきて、活動がどんどん広がってきています。

質問：会議ではどのようなことを話し合っていますか？

堀越：やりたい案を出し、それを具体的にどう形作るかを調整しています。それに対し、予算の殆どが区の援助のため、予算をどうするかという調整もします。

質問：活動時の役割分担はどのようにされていますか？

堀越：構成員の役割は、何が得意かで自然に役割分担が出来てきます。得意分野を活かして活動することは、年金生活者の喜びにもなり、いいことだと思っています。

きっかけ、地域が抱えていた課題

質問：活動が始まったきっかけはなんですか？

市：西区の上位計画を受け、西区の歴史や文化、自然と良さを「宝」と位置付ける「まるごと博物館」構想というものができ
ました。

堀越：それで、区の方から地域でボランティア活動を行っていた人に声をかけたのが始まりです。

あとは、九大が移転してくるということも、きっかけとしてあったと思います。

それから、西区には魅力が沢山あるのに発信できていないということもあったと思います。立ち上げ当初、西区の宝を調べたら300を超えていましたが、自分たちが知っているものはあまり多くない。一般の市民の人も知らないだろうなというのが、だんだんわかってきました。それでワークショップやりはじめました。

ただ、行政がこのレールを全部敷いたということではありません。

ワークショップで、何をしようかという目的から、検証や、ルールづくり、これを宝にしようなど、全部自分たちで検討していきました。大体、ワークショップを1年間実施して、中身がだんだん決まってい

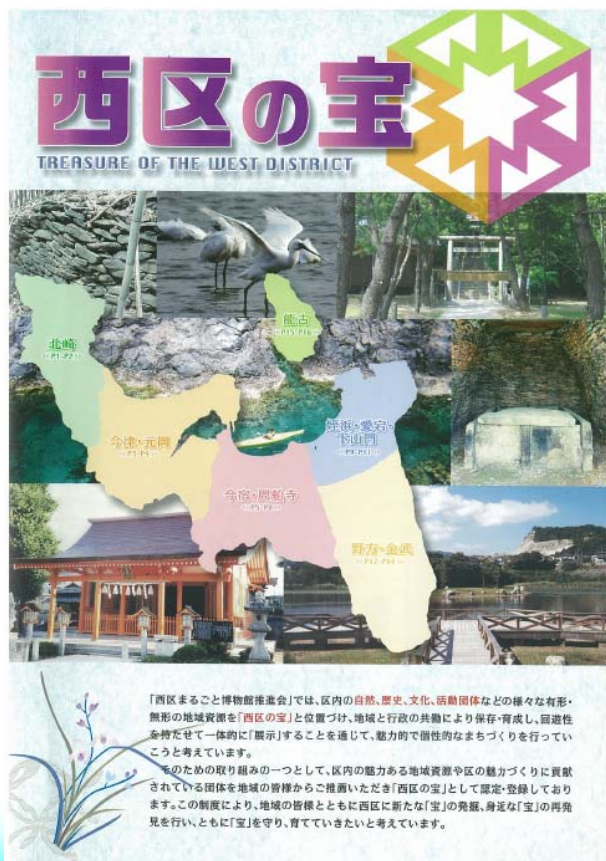
きました。区は、事務局を企画振興課が担当してくれています。事務局の役割は、我々の悩みを聞きながら、うまくコントロールしてもらうことです。あくまでも行政として、これはだめですというときにはじめてレッドカードを出す。そこまでは自由にやらしてもらえる。そういうスタンスが出来上がっています。

軌道に乗るまでに要した期間

質問：どれくらいで活動が軌道に乗りましたか？

市：構想ができて、メンバーを募集したのが16年度です。その後、ワークショップを行ったり、メンバー内の研修会を行ったりして、17年度から具体的なイベントなどを行いました。

堀越：準備期間として1年くらいですね。



西区まるごと博物館 in 小戸ヨットハーバ - 2009

～平成21年度 西区まるごと博物館推進会事業報告書～



力を入れている内容、ポイント

質問：活動で特に力を入れている内容やポイントは？

堀越：全体で年1回、西区のいろんな団体や宝を紹介する事業に力を入れています。あとは案内ツアーです。あと、新しい宝も年1回募集しています。

質問：宝の認定作業は皆さんで合議して決めているのですか。それとも条例等で決まっていますか？

堀越：何か基準がないと難しいため、一応自分たちでルールをつくっています。

質問：宝は募集するだけではなく、今ある宝もチェックしていますか？

堀越：数年おきにチェックしています。
あと、年1回の西区のイベントの際に新しい宝の方に認定書を授与します。「認定されましたから、式に出てください」というと、やっぱり皆さん大喜びです。たった紙1枚だけど、とても喜ばれます。こういう冊子に載りますよと、何年か後に改定版が出たら、そこに載せますよということが、ご本人たちにとっても、守られている宝にとってもいいと思っています。

質問：この宝は、国や県・市で定める文化財などはほとんど含まれていますか？

市：そういうものに指定されているものはほとんど入っていると思います。

堀越：全部つけ合わせはしていますが、入っていないものもあるかもしれません。

入っていないものの中で幾つかあるのが、認定基準の中で希少、また減少している動植物で、それを公表すると取りに行く人が

いますから、自然部会では公表しないこととしています。

自然は文句を言わないので、自然に対しては、私たちが気をかけないといけないと思います。

質問：他に活動としては、どのようなものがありますか？

堀越：来年度の活動の中で玄界島を楽しもうというものがありますが、今年で3回目になります。

質問：毎年やっているのですね。

堀越：定員はスタッフを含め30名ですが、3倍近い応募があります。行った人はもう大感激で、喜んでいただけています。それがきっかけで、玄界島の山に登るイベントを募集したら、これも応募が5倍近くありました。玄界島は地震などがありましたので、玄界島をよく知ってもらったら、玄界島を応援したいという何か皆さんの中に沸くかなと思っています。そんな形で玄界島とも輪が広がっています。

活動は石を投げたら波紋が広がるように広がり、全部面白いので、今はもうどのへんでとめればいいのかと考えています。

あと、活動の中では九大生との輪も広がって若い人の意見も入ってきています。ただ学生は卒業がありますので、その後継をどうするかという問題があります。大学生にとっても利害関係がなく、おじさんたちと対等に話して、その中でいい物が出来上がっていくことは、コミュニケーションにいいと思います。



失敗・失敗を克服した方法

質問：活動をする中で、何か失敗はありましたか？

堀越：私のところは、天候による中止などがありますが、大きな失敗はあまりないです。事故なども、出来るだけ安全に出来るようにしていますから、あまりないですね。

質問：やりたいことがあってそれを実現しようとしたときに、難しくてできなかったなどというものはありませんか？

堀越：皆さん凝るから、大体は出来ていません。

質問：イベントなどの時の道路使用などはどうですか？

堀越：それは市にお願いしています。警備の問題はしょっちゅうです。そういうときには、行政が表に立ってくれます。

堀越：それから、はじめに構成員の役割分担は、過去の経験で役割が自然に決まってくるという話をしましたが、それに縛られて、やることを構成員に押しつけていくようになると問題が生じてきます。そうすると、みんなボランティアで、楽しみでやっているのに、上から命令口調でやることを指示されると面白くなくて、辞めていくということがあります。

そうしない、いいかげんさ、自分たちが楽しんでやっていくということが大事です。そうじゃないと組織が運営できないと思います。

活動の効果、成果

質問：活動の効果・成果はどうですか？

堀越：数値目標などは特にあげていませんし、市のほうから「今年はここまでやってください」という話もありません。

プランも全部提案していますので、結果は自分たちが成功したか、失敗したかということです。逆に言えば、お客様がたくさん来てくれて、あるいはたくさん来なくても、喜んで帰っていく。子供が「ありがとう」と言ってくれた数が多かったとか、それが成功です。

質問：来ていただいた方と、自分たちがどうだったかという感覚とですね。

堀越：自分たちが楽しめなかったら、だめです。

市：同じ人がイベントを申し込んでくださるとか。そういうのは前回も楽しめたのかなと思います。

この西区の宝の冊子も、「この宝を見て実際行ってみたいので詳しい行き方を教えてください」というような問い合わせとかもあるので、ちょっとずつ浸透しているのかなと思います。

持続的に行う秘訣

質問：持続させていくためには、良い意味でのいいかげんさが必要ということですね。

堀越：自分の持ち出しで、楽しくてしょうがないということで活動する。そうでないと構成員は減っていきますね。それから、同じ立場で議論をするために、年齢差を許容できないといけません。私たちの部会は九大生が入っていて、逆になごやかです。

誰かが組織をうまくマネジメントしないといけないというところがあるから、そこが難しいと思います。



質問：今はまだそこまでせずとも、皆さんがうまく融合している感じですか？

堀越：ええ、今は何となくですね。年齢差が広がって、ごちゃ混ぜになったほうがいいのかもしれませんが。私のところは、女子大生とか、九大生の効果が出てきています。学生さんがいると、文化サークルや体育会のような感じで毎回わーとできる。それが運営が続く秘訣かなと思います。

大事なことは、「若干いいかげんなところ」「余裕を持って、あとは自分が楽しむというところ」、自分が楽しいというのが一番です。

行政はそれをうまくバックアップして、問題が生じればレッドカード、イエローカードを出すという形が良いと思います。



課題、困っている内容

質問：活動によく参加される方が、会の方に入ってくることはありますか？

堀越：ありますね。ただ人数は多くありません。皆さん、「面白そうですね」という声は挙がります。じゃあ「やってみませんか」と声をかけて、名刺を渡してもなかなか入ってきません。

やはり、一番の悩み・困っているのは「新

陳代謝と老化」の問題で、新規メンバーの募集です。

質問：メンバー募集は随時ですか？

堀越：随時やっています。いろんなところでやっていますが、募集で応募してくるというのは、そう多くありません。

今後の活動

質問：今後の活動についてはどうですか？

堀越：私のところは自然体で広がっているので、今の活動を継続しながらということですね。

質問：どんどん活動が広がって手が足りなくなるのではないですか？

堀越：上手く分業出来るように、催し物のリーダーなどは随時違う人がやっています。

質問：誰か1人がトップでずっとやっていくわけではないのですか？

堀越：ではありません。私のほうや皆さんから聞いたプランを、毎回の会議に出して、年間計画で今度こんなのはどうですかとみんなで検討しています。それで決まったものを、大体11月ぐらいから、来年度の折衝を始めて、1月ぐらいには外部との折衝もできるような形になります。

質問：全国の「まるごと～」のような組織とのネットワークについて、具体的な動きはありますか？

堀越：ネットワークに入ろうと1回チャレンジしましたが、私たちがホームページを持っていないことがネックになって、うまくいきませんでした。今は市のサイトの中にありますので、単独にホームページを持ちたいと考えており、それが課題になって

います。

官民の連携

質問：最後ですが、活動の中での行政との連携は、警察との折衝など、そういうときに区に表に立ってやってもらっているということですか。

堀越：あと、区の中に連絡場所があるのは、保証人が区であるようなもので、結構大きいです。

一般の人が電話するとき、区の中に担当がいるのは安心感があります。信用。これが最大のメリットです。それから、行政間の折衝は、内線電話で話し合っすぐに解決します。

行政と民間が連携する上での課題は、行政のコントロールではないでしょうか。行政がコントロールしすぎると、みんなは面白くありません。ただ、いざというときにレッドカード、イエローカードを出すのはどうしても必要なことです。

質問：行政の担当の方は、人事異動で代わるとは思いますが、いい関係性を引き継ぐ伝統はありますか？

市：まるごとは自由というのが売りで、だからこそ自由な発想で充実していつているので、そこにあまり行政が細かくかかわりすぎたら、逆に良さが損なわれてしまうというのは、最初的时候に、引き継がれました。

質問：西区さんとはうまくやっているようですが、県や市全体に対して、もう少しこうしてくれたら活動しやすくなるなどの意見はありませんか？

堀越：それは活動にはみんなお金が絡むの

で予算があります。例えば、案内プレートが汚れているから、新しくしてほしいとしても、それは教育委員会にとか、いや、これは樹木で公園課、というふうになります。ただ、今はなかなか上手くいかないことも、実績が上がってくれば、だいぶやりやすくなってくると思います。

質問：だんだん、活動が浸透していけば、それが信頼になって、今はちょっと難しいことでも、うまくやれるのではないかなということですね。

堀越：あと、何とか自前でできるような形にしたいなと思っていて、毎回反対を受けるのが営利の問題です。冊子の裏にスポンサーの広告を入れて自主財源にする、広告協賛を取るなどが出来るようにしたくて、次の改定には間に合うかな、どうかなと考えているところです。

それを行うと、それがほかのお金に使えますので、もうそろそろ始めてはどうかと考えています。ただ、問題はそれでお金が賄えると、その分予算が削られるということもあるので痛しかゆしです。

NPO法人化というの、何年か前に検討しましたが、結局、自主財源をどう出すかというときに、営利とボランティアの境目をどうするかということがあったのと、それと同時に景気が悪くなったので、これは今難しいということで棚上げにしました。

質問：今日は長い時間ありがとうございました。



③久木野地域振興会

さわはたとおる
沢畑 亨 氏



【沢畑亨氏プロフィール】

栃木県宇都宮市生まれ
(熊本県西合志町育ち) (49歳)
久木野ふるさとセンター愛林館 館長
1994年に全国公募で愛林館の館長に選ばれ就任

【活動団体諸元】

団体名：久木野地域振興会
会員数：40名程度
平均年齢は概ね60～70代 農業や引退された方が多い
その他：愛林館の職員は5名で3名はふるさと雇用で雇用
『連絡先』
水俣市久木野ふるさとセンター 愛林館
〒867-0281 熊本県水俣市久木野 1071
TEL・FAX：0966-69-0485
E-mail：airinkan@giga.ocn.ne.jp

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

水俣市の中山間地域に位置する久木野地区の愛林館を核として、食・環境教育・イベントなどの活動を通じ、村おこしを実践する。棚田と森の公益性を理解してもらい、水を育み空気をきれいにする棚田や森にもっとお金をかけないといけないという世論形成を目指す。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 活動を通じて棚田や森の公益性を認める世論形成を目指す
- 活動は「食」、「環境教育」、「イベント」が3つの柱
- イベント参加者や主催者も「使命感」「満足感」「実利」を与えることが必要
- ボランティアは「使命感」「達成感」「実利(目に見える利益)」で満足させることが重要

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 人を集めるのが課題。色々なイベント等を開催し目的を持った人に訪れてもらうようにすることが必要
- 継続して開催していくことにより、徐々に参加者が増加

活動の効果、成果

- メディアなどへの露出により知名度が向上
- 地域の人々が地元を'なにもないところ'から'棚田があって良い水のあるところ'と誇れるようになった

活動を持続的に行う秘訣

- 楽しんでおもしろく、継続することが重要
- 地域の習慣や伝統などを尊重することが重要

今後の活動

- 現在の活動を継続し、長いスパン(10～20年)で成果を出すことを目指す
- 地域の集落営農組織設立の支援や今までの草刈りなどの支援に加え田植えなどの支援も実施
- 「集落営農」の組織への協力

官民連携の課題と望むこと

- 助成金などの申請・交付の労力や時間を解消する、少額(20～30万円程度)で、すぐに申請・交付が出来る使い勝手のよい支援制度の設立

プロフィール

質問：職員数は、何名ですか？

沢畑：毎日出てくるのが5人です。うち3人はふるさと雇用の補助金で雇っている短期の職員です。

質問：こちらを支えている会員や、ボランティア組織などはございますか？

沢畑：ここは久木野地区の住民団体が運営していて、その団体の会員が40人ぐらいです。

質問：会員の方は、この地区の方ですか？

沢畑：そうです。イベントをやるときに支えてくれる人たちはいますが、特に組織はありません。

質問：振興会の方の主な年代は？

沢畑：ほとんどが60代、70代の方です。

質問：お仕事は？

沢畑：統計上は農家になるわけですが、実際の主たる収入は年金という方が殆どです。

活動状況

質問：現在、どのような活動を主にやられているのか教えてください。

沢畑：大きな柱が3つあり、1つは食べ物です。レストランとお店と加工場があって、作った加工品を販売します。あと手作りで作って食べる体験教室です。あと、「家庭料理大集合」として、普段食べているものを持ち寄り、食べ、その料理の料理カードを作ってデータベースとして蓄積していくことをやっています。

質問：基本的にはここで採れたものを製品加工していくということですか。

沢畑：ここで採れたものだけではできませんが、主たる材料はなるべく近くでと考えています。

質問：それが1つ目の食という柱ですね。

沢畑：2番目は環境教育です。この中に森づくりがあり、広葉樹の森を育てています。昔から林業が盛んで、戦後スギとヒノキと松だけを植えすぎたので、それ以外の森を増やそうと思ってやっています。それと環境教育全体として、世論形成の手段としてやっています。山に住んで森の手入れをし、棚田の手入れをすることは、木や米を生産するだけではなくて、そこに公益的な機能も同時に発生します。その公益的な機能をこれまでほとんど、ただでみんな使っているのですが、「ただじゃだめなのでお金を払ってください」という私の意見に賛成する人間を増やすためにやっています。森づくりを提案すると、あまり反対する人はいません。普段対立しかしていないような人々でも、その場面ではちゃんと一緒に協力できます。森づくりは21ヘクタールをボランティアと一緒に育成中です。ボランティアで管理している森づくりとしては、日本最大級だと思います。

棚田の保全もやっていて、総称して「田援計画（でんえんプロジェクト）」と呼んでいます。その1つが大豆耕作団で、5000円の会費を頂いて、会員には40㎡から採れた分の大豆またはうちの加工品を配当するという形をやっています。

質問：会員さんが来て、一緒に手伝うこともありますか？

沢畑：権利はありますが、殆ど行使する人



はいませんし、労働力としては頼りにしていません。森づくりはボランティアと一緒にやるということで、それは労働力として期待していますが、大豆については、そこは期待していません。

質問：森林のボランティアというのは、どのような方が多いのですか。

沢畑：近ごろは、60 前後の男性で、これまで会社人間で、これからやりたいことをやるという方です。

質問：それは水俣市内など近隣の方ですか？

沢畑：水俣市内はほとんど来ません。熊本都市圏が一番多く関東や関西からも毎年参加者があります。

草むらになった棚田がいっぱいあります。よく耕作放棄地といますが、放棄しているのではなく、やりたくても出来ないので断念しているのです。だから耕作断念地と呼んだ方がいい。その草を刈るボランティアもやっています。

それから「棚田のあかり」といって、棚田に光を灯すこともしています。

質問：それは他の人に見に来て貰うイベントですか？

沢畑：そうです。生産上は何の役にも立ちません。

草むらの草刈りは、イノシシの居心地が悪くなるので、周辺の農地のためになります。害虫の居心地も悪くなります。あと、「山村部で棚田をどうやって守ったらいいか」についての研修も受け入れています。研修という商品を販売しているわけです。研修は2時間ぐらいが多いですが、先々週は2泊3日のをやったところです。最長で

は3泊4日までやったことがあります。

質問：宿泊施設もここに完備されているのですか？

沢畑：完備というほどでもないですが、14畳と20畳と4畳半が2つです。大体、大広間に雑魚寝する形です。お風呂もあります。

それと、棚田食育士という資格を作りました。

質問：それは 沢畑さんの方が作られたのですか？

沢畑：はい。霧島食育研究会と共同で作りました。食育については、どうでもいいような民間資格がいっぱいあって、みんな結構お金を使っていますので、じゃあ、自分がやろうかということで、1泊2日で始めました。

質問：そういう環境教育が2番目の柱ですね。

沢畑：はい。3番目はいろいろなイベントですね。

今、マラソン大会の募集中です。

質問：それは地元のイベントですか？それともどこから来てもよろしいですよというものですか？

沢畑：参加者はどこからでも大丈夫です。ここは鉄道跡を利用して、日本一長い運動場という名前で、車を入れない道路になっています。それを利用して、市役所が第1回を始めました。それが「しし鍋マラソン大会」です。今までに話した色々なイベントは全部僕が始めたのですが、これだけは僕が始めたものではありません。



質問：活動内容は最初から依頼されていたのですか？

沢畑：公募で選ばれてここに来ましたが、そのときに何をやってくれというのは頼まれていません。当然、この施設はあったので、加工品を作り売ることが決まっていたのですが、その内容や、やり方について「こうしてくれ」という話は全くありませんでした。自由にして良いということで、それは大変助かりました。あと音楽会とか、講演会とかのイベントもしています。それが3本柱です。

質問：地域住民との関係では、イベントなどは地元の方の協力でやっているということ、あと、例えば加工品の材料などは、地元で採れるものについてはそれを使っているということですね。

きっかけ、地域が抱えていた課題

質問：この活動を始めるきっかけと、来たときの問題・課題などありましたら、教えてください。

沢畑：育ちは熊本ですが、東京の大学に行き、大学教授を目指した後、コンサルタントになり、その後、地域に入って自分でやりたいと思っていたときに、ここの公募の話聞き、ここならやれそうだなと思って来ました。

質問：来たときに、まず何から手を付けたのですか？

沢畑：食べ物を作って売るというのはありましたので、加工品を作らしようと地域に呼びかけました。そのときは、市が施設の計画をしたときに、加工品づくりに関心のある人のリストを作ってあり、そのグル

ープに呼びかけてみました。もう1つは、企画・運営をする地元グループが必要だったのですが、それは地元の方から手を挙げてくれた人たちがいて、大変うれしかったです。それで、愛林館の企画・運営グループという名前で、最初のうちは毎月集まっていました。

人数は5、6人いました。施設ができる前に「村おこし研究会」というのがあり、駅跡地を活用し村づくりをしようと、自主的に動いていたようです。ここを建てるにあたって、導入機能などについて市役所とだいぶ話をしたそうです。

それがあり、私が来たときには、応援しないといけないという雰囲気がありました。

質問：村おこしなどの機運が高い地域だったということですね。こちらに来て、イメージとこれはちょっと違ったなということはありませんか？

沢畑：大きく違ったということはありません。ただ、市、県のレベルで、専門家が少ないため、自分の発言力が大きくなり、自分の意見を政策的に実現しやすい立場になったというのは、いい方に予想外でした。あと、田舎の常識が僕にはなかったから、それを地元の人に教えてもらったことはだいぶ助かりました。田舎の文化を通訳してくれる人がいたということです。そういう人が何人かいて、それが一番助かりました。

軌道に乗るまでに要した期間

質問：活動が軌道に乗るまでに要した期間？

沢畑：2、3年でやろうと思っていたことの大枠は出来たと思います。大体、96年ぐらいまでに今やっているようなことの大枠

は始めました。

力を入れている内容、ポイント

質問：活動で特に力を入れている内容はなんですか？

沢畑：世論形成を目指すということです。

質問：それに対し、どのような取り組みをしていますか？

沢畑：メールマガジンは年に30回ぐらい発信しています。イベントなどのお誘いはそれでやることが多いです。あと、新聞に記事を書いてもらうというのも一番有効です。情報発信としては、若い人が新聞を読まなくなった。そういう人にどうやって情報を届けるかが課題になっています。



質問：若い世代が、なかなかこういう活動などに参加してこないということですか？

沢畑：若者の参加が減っているのは確かです。昔は若い女性と60前後の男性というパターンでしたが、最近は若い女性が減ってきました。若い男性は全般的にだめです。ここでやっている変なことだけど面白そうなことに好奇心をもたないです。

質問：世論形成を生み出していく上では、本来は若い男性などにも情報を届ける必要

がありますよね？

沢畑：届けたいですが、しょうがないですね。

世論形成を図るためには、広く浅くすそ野を広げる、深く狭く頂上を高めるの二つがありますが、両方は難しいため、頂上を高める方向を主にやろうと思っています。それは熊本市周辺からでも2時間程度かかるため、そんなに大勢は来ません。だから、少人数を相手にみっちりやる方法でと考えています。

質問：参加されている方は大体同じメンバーになってくるのですね。

沢畑：非常に堅いリピーターはいます。今、ふるさと雇用で雇っている3人も、もともとはボランティアとして来た人です。ボランティアの方には満足して帰ってほしいと思っています。満足するには、使命感、達成感、実利（目に見える利益）、この3つが必要です。ボランティアに来る人なので、社会的な使命感はあります。達成感は、うちは重労働ですから必ずあります。目に見える利益は、参加費がただとか、ボランティアに来る人同士の付き合いが面白いとか、そんなところですか。リピーターになる人は、そこを満足してくれたわけですから、そこは非常に気をつけています。これは主催者も同じだと思います。主催者も使命感と、達成感と、利益を得ないといけない。使命感はあります。達成感も最初は計りにくいのですが、でも「ああ、面白かった」と思えるかどうかです。利益としては草刈りが出来ていくというのは利益です。



失敗、失敗を克服した方法

質問：今までで、何か失敗はございますか？

沢畑：終始一貫して人が来ないことです。この立地で通りすがりの人はいませんし、目的があってここに来る人だけですから、しょうがないです。それは新幹線が開通しても影響はないと思います。高速は早くしてほしいですが。

質問：運営している中では、苦しいとかはあまり感じないですか？

沢畑：ええ。でもコンサートをやって人が少ないときには、ちょっと申し訳ないところはあります。

質問：そういう意味では、イベントをやって目的をつくらないと来てくれないということですね。

沢畑：ええ。働くアウトドアとか森づくりの合宿は、募集の情報提供が遅れたということもありますが、最初の参加者は2人でした。でも内容は、すごい重労働なので、そこに人が来たというのは、実はすごいことで、地元の人にはショックだったようです。僕は学生のころからやっていたので、そういう人間がいることはわかっていました。

質問：参加者が2人だったら、来年はどうしようかなという話になるのかなと思うのですが、続ければ大丈夫という思いがあったのですか？

沢畑：やるしかないということです。

質問：そこを継続していくのが秘訣なのですね。宣伝とかのやり方が問題であって、森づくりとか、そういうものに対して皆さんが否定しているわけではないということ

ですか？

沢畑：ええ。ずっとやっていると、30人か40人か、それくらいは毎年安定して来れます。

活動の効果、成果

質問：活動の効果・成果はどうですか？

沢畑：地区の知名度は大きく上がったと思います。

新聞やテレビでも、取り上げてもらっています。

あと、地元の人が「久木野はどんなところですか」と聞かれて、昔は「いやあ、山の中で何もなかですよ」と言っていたのが、今は「棚田があって水が湧いてよかところですよ」と言っているというのを聞いて、うれしかったですね。

あとは、ここで売り上げて人件費を払っている分、その直接的な経済効果はあります。僕の給料は抜きにしても、地元の人たちに300万くらいはあります。

棚田についても、知名度が上がり、昔は「景色がきれいかですな」で終わったのが、今は「景色はきれいだけど、大変でしょう」と言ってくれます。そういう理解が深まったと思います。

だから、山や健在な森林があれば、水をためて土を守って、水をきれいにして酸素を出してくれますので、「それにお金を払わないとね」という世論を作りたいというのが僕のねらいです。

質問：自然は人がちゃんと手を入れないと維持は難しく、その負担を地域以外でもしましようということですね。

沢畑：昔くらい米が高ければ、その時は地域がやればよかったのですが、今はそれで

は困難です。そのままだと、耕作断念地になるか大資本がそれを集積していく恐れがあります。また地主制が復活する恐れがあります。

農業政策として、農地転用をもっと厳しくしないと、土地目当てで農地を買って、5、6年形だけ農業をして、すぐに転用させる人が出てくると思います。そうしないと、良い農地が全部なくなって、食料生産力が減退します。そういうことのないように、世論を高めていきたいと考えています。

持続的に行う秘訣

質問：活動を持続する秘訣は何ですか？

沢畑：楽しんでやることだと思います。面白くないことは継続できません。長くやるのが大事で、そのためには楽しくやるということです。

質問：例えば地域の周りの方と、うまく長く付き合う秘訣はありますか？

沢畑：地域内の古くからあるような習慣みたいなことは大事にと思っています。最初に東京から来たときに、東京時代に付き合いのある人から、「いろいろ考えたらおかしいと思うことはいっぱいあるけれど、それは訳があって続いているわけだから、頭ごなしに否定したらいかんよ」というのはよく言われました。それもそうだなと思い、3年ぐらいは全部何を言われてもイエスと言おうと思っていました。

課題、困っている内容

質問：今困っている課題などはありますか？

沢畑：情報発信はやることは分かっている

のですが、いろいろな事が立て込んできて、十分にできないところがあります。いろいろとやることが多過ぎるのかもしれない。もっと整理したほうがいいのかもかもしれません。あと、ここは市の施設で、市から管理費をもらって基本的な運営費にあてているわけですが、その管理費が削減になったときには苦しかったですね。

質問：その時はどう対応したのですか？

沢畑：基本的なことは変えないで、儲かりそうにないことをやめるとか、いろいろな削減をしたりしました。あとは委託事業や補助金をとってきたりして、穴を埋めました。ただ、市の中でもいっぺんに削減するのはあんまりだろうと思う職員も大勢いて、予算を付けるというのは無理だったのですが、こういう事業があるよなど、だいぶ協力はしてくれました。

今後の活動

質問：今後は、基本的には今の活動を続けていく中で、新たなことにも挑戦していくということですか。

沢畑：そうですね。5、6年やってすぐに成果が出るということはなかなかないので、10～20年続けて、わずかな変化が出てくれば良いと思います。

もう1つは、今、集落営農の組織をつくりつつあります。今まで個人個人でやってきたものを、まとまって立ち向かおうとしています。そこにはぜひ協力しようと思っています。



官民の連携

質問：行政との連携についていかがですか？

沢畑：市の施設ですから、当然連携はしていますし、苦しい時に一生懸命支援してくれる人はいっぱいいて、大変ありがたいです。あと、書類などの作成も、市の担当者がわかる部分は全部書いてくれていますので、本当に助かります。市とはそのように、非常に密にやっています。

県とも、だいぶ付き合いができてきています。県で一番ありがたいのは補助金情報です。あと熊本はまちづくり活動が盛んなので、まちづくり団体をまとめたネットワークがあって、その事務局を県庁がやっており、そこもよくサポートをしてくれます。

質問：うまくやられているようですが、もっと何かこういう支援があればということはありませんか？

沢畑：助成金は欲しいです。1件20万で良いので、申請書は1枚で、審査は3日。申請書を出したら、すぐにくれるか、くれないかがわかる。それで、決算を見て貰っておかしかったら返却するというようなものがあるといいと思います。くるか、こないかわからない予算の作成に時間を使いたくない。とにかく短期間で判断して欲しいと思います。申請して補助されるまでのタイムラグが大きすぎます。、地元が盛り上がったときに、小さくていいので、さっと出して貰える制度が欲しいですね。20万、30万で結構面白いことができます。

質問：今おっしゃった、くれるかどうかかわからないものに時間をかけたくないというのは、分かりますね。

沢畑：僕はだいぶ慣れているほうですが、それでも負担は感じます。だから、もっと事務的に不慣れな地域づくりの団体だったら余計だと思います。

だから、助成を望むこととして、市の職員はそういう技術をもっているから、市の職員が書類づくりの手伝いをしてくれると助かります。

質問：行政と民間が連携する上での課題については？

沢畑：普段付き合いのある市の職員はみんな一生懸命やっていますから、よくやっていると思います。

休みの日も出てくれる。だから、むしろ、そういう方の、代休などをちゃんと取らせてあげるとか、残業手当をちゃんと払うとか、そういうのをやってやらないとかかわいそうだと思います。書類の簡素化などもありますね。

質問：今日はお忙しいところ、お時間を頂きましてありがとうございました。



棚田の様子



【郷田美紀子氏プロフィール】

宮崎県綾町生まれ（62歳）

薬剤師・百姓

葉膳茶房オーガニックごうだ

葉膳宿舎ビオスヴィレッジごうだ

※綾町長であった父を持つ。薬剤師として相談薬局をしながら、薬局の中に台所を作り、食について話していく活動を32年前より開始。無農薬野菜作りに取り組み、安全・安心な野菜を作り、加工して提供する食育推進活動を行っている。

「綾の景観と理念を守りたい」と98年からは鉄塔反対運動、世界遺産運動を興すなど、「綾町が目指したらいいだろうな」という活動を続けている。

『連絡先』

郷田薬局

〒880-1300 宮崎県東諸県郡綾町西中坪

TEL 0985-77-0045 FAX 0985-77-2238

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

父と子の思いとともに、地域の宝（綾町の山・照葉樹林）を守る活動を行う。また綾町の安全・安心な食材を提供し、綾町の自然の中で心も体も癒して貰うことを目指す。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- これから育つ子供達に、校歌の中で歌われる美しい山の風景を残す
- 自ら実践して示す
- 綾を訪れた人に安全・安心で健康的な食を提供し、心と体を癒せる場を提供する
- ニーズよりもトレンド。次にどうなるかを考え、時には反対が多くてもやる必要がある
- 知名度を高め、人々の関心を得、協力を得ることが必要

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 鉄塔の反対運動などは難しかったが、活動したことにより地域の山を大事にしたい気持ちは広がった

活動の効果、成果

- 地域の人の意識が‘みんなの山’というように変化
- 安全・安心な綾町の食材を求めに多くの人々が来訪

活動を持続的に行う秘訣

- 地域の宝を心から大切にしたい、子供達に残したいと思う気持ちが必要
- 多くの人と関係を構築し、見方になって貰うことが必要
- 積極的に外に出て情報発信をして、知名度を上げ、外からの支援を受けることが重要
- ‘活動の留め金となりぶれない’リーダーが必要

今後の活動

- 現在の活動を継続し、綾町に宿泊し、森を巡り体と心をいやして貰うことを目指す
- この活動を引き継ぐ人材を育てようと思っている

官民連携の課題と望むこと

- 賛成、反対などに固執しないで、是々非々で行政と付き合うことが必要

プロフィール

質問：よろしくお願ひします。

郷田：よろしくお願ひします。

私は、ふり返ってみて考えると自分を突き動かしてきたものというか生きる意味は、多分私が四人の子供の母であることと郷田實（前綾町長）の娘であるということが大きくあると思うのです。

若い頃父の人生と私の人生は別だと思っていたのですが、そう思って生きてきたつもりでしたが、そうもいきませんでしたし、とても父を愛している自分もいました。自分の人生にも色々な問題が降りかかってきました。その体験を通して父をよく知ることができました。その意味で父の話も重ねてお話ししたいと思います。

きっかけ・内容・失敗及び活動が続けられた秘訣や効果について（農業について）

質問：最初に農業への取り組みからお教え下さい。

郷田：私は、薬剤師として相談薬局をずっとしていましたが、処方箋の意味すら考えないで、薬を調剤するというのが、私の意に合いませんでした。大体、薬は要らないと思っていました。なぜかという、私自身が体質的に薬をあまり受け付けないのです。だから、自然の中で治すことが一番だと考え、薬局の中に台所をつくり、食のことをいろいろ話してという活動を32年前に始めました。そのうちに、子供が大きくなり、大学に行っている長男が「もう大学に行かん」と言うのです。「何を考えているの？」と言ったら、「僕は机の上の仕事よりも百姓がしたい」と言うのです。それは家

でよく有機農業や自然生態系の話をしていた父（おじいちゃん）の影響もあったと思います。それで百姓を始めたのですが、全然経験がない。誰か手本になる人がと思いましたが、付きっきり教えてくれる人はいませんので、その役目は私だと思ったのです。私も草1本抜いたことはありませんでしたが、母親としてやってやろうと思いました。息子を一人前にするためだったら、私は何でもすると。だから、本当に百姓仕事の最初は母としての思いなのです。ただ、母としてとにかく私が休めば、この子も休むし、手を抜けば、この子も手を抜くと思っているから、自分で実践してみせるしかない。だから本当にとにかく走り続けました。

質問：一緒に始めてからはどうでしたか？

郷田：無農薬の野菜をつくるということは決めていたことでした。それで、最初は何も経験がないので、周りの畑と同じように草1本も生やさずに栽培をしていたら、芽が出てもすぐに虫にやられてしまう。色々なものを試すことが5年ぐらい続きました。ある時、広すぎて手が回らないところが荒れて草ぼうぼうになってしまっていました。そこを足でポンポンと踏むと、本当にふかふかとした土が出てきたのです。そのとき、父がよく山を指さして「自然の山は誰も耕さない。誰も手をやらない。けども毎年、何万いや、おそらく何十万という実をつける。自然の力というのは、すごいものだな」と言っていたことを思い出しました。その時には何にも感じていませんでしたが、その荒れていると思っていたところに、すごい土ができていたというのを見て、パッと自分で腑に落ちたのです。それから、畑仕事の新しい形が見えてきました。一言でいえば、虫もおなかですくってということに気

づいたのです。虫もおなかですくのに、食べ物である草を全く残していないと、この虫が野菜を食べるのは当たり前です。いつも周りからは「草が生えている」とか言われますが、無農薬で優しい百姓仕事をしていることが、地域のシンボルになっていけば、綾全体のイメージに重なるだろうと思っています。なぜなら、私は、郷田實の娘の郷田美紀子で、私がすることは綾のイメージになっていくだろうということは常に思っています。

質問：郷田さんの地域での役割ですね。

郷田：綾の野菜は安心・安全ねという1つのシンボルにはなると思っています。父が生きているときに「本物とは何か」と言う人に対して、「本物とは人を騙さんもの。自分中心に生きんもの事、そして地球の環境を汚さないものことである」と言っていました。それに近い生き方が畑仕事で出来ていると思えます。

この間、統廃合される農業高校で最後の講話をさせていただきました。その時長男の話をしました。長男が「弟たちは薬剤師になったり、医者を目指したり、お母さんの役に立っている。でも、僕は百姓仕事で、何の役にもお母さんの役には立ってあげられない」と息子が言ったときに、私が答えたことをその子供たちに伝えたのです。「確かに医者や、薬剤師は尊敬される目立つ仕事ではあるけれども、お母さんは見えなくて地面の上をはって、薬を降らないで草を抜いて、そこで取れたもので出汁をとって、料理をつくって、そういう手を抜かないで一つ一つを丁寧にする事、それがなかったらお母さんじゃない。それがあってお母さんは薬剤師として、相談薬局の食を広めることができる。そこのところを手伝ってくれているのだから、それはすごく

大事な事をしてくれているのよ」ということです。だから、目立つ仕事も大事だけれど、目立たなくても命ということに手を抜かずに向き合うことが大事だと伝えました。

質問：ご長男への思いをお教え下さい。

郷田：実は私を様々に導いてくれた長男が、去年突然くも膜下出血で亡くなりました。色々な活動は、この子がいたから、できてきたことでした。

こんな事がありました。一緒に農業をしているときに、いくら自然の農法と言っても荒れてきます。それで「荒れているね」と言うと、「機械が故障していた」と言うのです。そこで私は一人で畑に行き来る日も来る日もクワで手入れをしました。すると、息子が覗きにくるのです。それに気づいているけど、私は、知らん顔している。そうしたら、その息子が「お母さん、これからは機械のせいにはせん。基本は手やね」と言った。それを言わせるために一人でやったのです。

私は本当に一人っ子の根性なしだから、子供を育てたつもりが、やっぱり自分育てになっているなっていうのを思いました。

食事指導をする中で、啓蒙運動として具体的にここで食べさせることは理想ではあると思っていましたが、最初はみんなから理解されませんでした。今は薬剤師が東京や横浜、福岡からも勉強に来て、郷田さんみたいなことをする薬剤師になりたいという人たちも出てきました。でも、具体的に「よし、つくるぞ」と思って、飛び出せたのは、息子と一緒にやっている安心・安全な野菜を加工して提供していく、これは大事なんじゃないかなという思いですね。



**質問：つくるだけじゃなく提供するという
ことですね？**

郷田：そうです。最後の最後にポンと押し
てくれたのは、やはり長男だったと思いま
す。

宿泊所をつくったときも、私は食のこ
とを広めたかった。食べたらずそくさと帰っ
ていく方々に心と体というものを休めてい
ただきたいというのがあって、とどまっ
てもらうことをしたいなど、前から思っ
ていました。これを実践するのは非常に大
変でしたが、やっぱりそれが出来たのは
母としての心だと思っています。



(森を守る運動について)

質問：森を守る活動についてお教え下さい。

郷田：具体的に森を守る活動を語れるのは
自分のしてきた「綾の自然と文化を考える
会」の運動です。これは、1998年綾町
に送電線巨大鉄塔が建つことに反対するた
めに過激な反対運動を始めました。その運
動の試行錯誤の中で「照葉樹林文化シンポ
ジウム」の復活や綾の森を世界遺産にする
運動を行ってきました。しかし、今から約
50年前に綾の森は大きな時代に反した戦
いによって守られたのです。守られていた

のです。国有林を全伐採し、杉山に植えか
える。当時にはあたりまえの森林事業に父
は命がけで反対しました。国のお役人と戦
うための理論武装をしていきました。

本を借り、仕事の合間に目が見えなくな
るまで勉強をしていたそうです。そしてわ
かったのは、「命は巡る」ということです。
スギ・ヒノキの山は人間にとって便利な、
金になる山の畑だけど、動物は住みづらく、
腐葉土も酸性で、それで海の森は育たない。
自然の山は微生物がいて、それを食べる虫、
小鳥がいてという連鎖があります。そして、
おしっこ、うんち、しかばね、そして沢山
の葉っぱという積み重ねの中で、30センチ
に500年という時間を要して、豊かな土壌
を作っていく。そこに湧いてくる水が、海
の森を育てている。あの森がなかったら、
海の世界連鎖も始まりません。だから森づ
くりをしなければならぬということです。

それで綾町の自然生態系農業という有機
農業の認証制度を日本で初めてつくって
いったのです。残飯を堆肥にするというのも、
今はいろいろなところがしていますが、綾
町が最初です。ふん尿を液肥化するとい
うのも綾町が最初です。父が目が見えな
くなるくらい勉強し見つけた「照葉樹林」と
「命の巡り」という2つが山を守るときの自
分の理論武装になったようです。

ただ国の役人は次々かわる、すぐ考え
方も変わっていく。だから確固としたもの
にしないといけないと思い、国定公園を
目指したようです。

ところが、当時の綾は全然知られてお
らず、国定公園になれるはずがないのです。

それで、「どうすればいいのか？これは、
有名にならないといけない」ということ
で辿り着いたのが世界一の吊り橋をつ
くるとのことだったようです。それは綾を有名

にすることで、山を守りたいという思いだったのです。そして、本当に有名になって国定公園になった。

また、綾町は文化がないので、染物とか焼き物とか、そういう方たちをすごく優遇しました。だから綾町は工芸者の町で、つむぎ、木工など44軒の工芸者が住んでいます。当時、父は「百姓は何とも思っとらん。工芸者は優遇する、つり橋はつくる、綾町は何を考えているのか」とよく言われていました。でも最後につくったのが、今は道の駅とか物産館になっている「本ものセンター」です。つくってみたら、いろいろな人が買いに来てくれる。綾町はどうか、綾のイメージから全部出来上がっていたので、綾のものが売れる。町長が考えていたことはこういうことだったのかということが、町民は分かったのです。

質問：町長の思いが町民にやっと理解されたのですね。

郷田：そうですね。「先を行かねば」、「ニー

ズよりもトレンド」とよく父が言っていました。町民が言うとおりにするのが町民のためになることではないということです。これから先こうなるだろうという方向を読み取って、どんなに反対されても、どんな苦難に遭ってでも、ちゃんと次を考えて方向性をつくってあげることが、リーダーとしてはとても大事なことだと言っていました。結果的に父は辞めたあとに、綾町の人から神様のように言われるようになったのですが、在職中は、いろいろと言われたようです。

質問：そこから、郷田さんの運動に繋がるのですね。

郷田：綾の山は命がけで守られた宝の山として価値のあるものだと私は思っていました。それは、町民がみんなそういう共通の認識をもっていると私は思っていました。そこに巨大鉄塔が建つことになった。

私は、鉄塔は綾町の理念と景観を崩すと思いました。同時に、それは地域エゴで



はないかなとも思いました。でも、しょせんそんなものだと思うのです。他のことも考えていったら、何もできません。自分の地域は自分たちが頑張る。そしてもし隣の町の人が反対だと思ったら本気でその運動をしてほしい。だから、私は綾の山には建てさせないという運動を始めました。鉄塔が要る要らないに関しては、色々な視点からの意見があると思いますが、話があまりごちゃごちゃになると、ややこしくなります。だから、私は「綾町の景観と理念を崩すことに反対だ」ということだけで、ぶれないと決めました。

実際、本当に何回もくじけそうになりました。

質問：活動を続けられた要因は何なのか？

郷田：もうだめかなと思って、あきらめようかなと思ったときに、1つ映像が浮かぶのです。それは「めぐらす山のうるわしく」という小学校の校歌。それを歌っている小さい子供たちの姿が浮かぶのです。ここで育つ人にとってはとっても大事な郷土の山なのです。鉄塔の台座になってしまった山を子供達に見せて育てたくないというのが、一番の理由でした。色々な活動を続ける理由を消して、消して、最後に残るのはそこで、それがあから、あきらめられない。

色々なことをしましたが、やっぱり反対運動というのは失敗でした。水俣の人からも風評被害で苦しんだ経験から、「反対運動は失敗するぞ、あれはいかんぞ」と言う助言は受けていました。しかし綾町の人たちが、巨大な鉄塔が建つことに賛成するはずがないと思っていたのです。いつかわかって貰えと。

ただ、九州電力を相手にしている運動です。みんな勝ち負けもわかっています。どっち

につかないといけないかというのも、わかっている。

影で応援しているという人はいます。だけどみんな色々なしがらみの中で動けない。

質問：世界遺産運動に変わったのはどうしてですか？

郷田：父のことを本に書いていた稲本正さんとお話させていただき「世界遺産運動を興したらいいです。綾の森は世界遺産に匹敵しますよ」と言われた事がきっかけです。ただその前に私は、岩木山のお山参詣に感銘を受け、何かみんなの愛する心をかき立てるような運動はないだろうかということで、世界遺産運動は起こしかけていました。ただ宮崎では鉄塔反対や綾の森のことで、私が世界遺産運動は興せない状況にありました。そうしたら「じゃあ、東京で興したら」と言われ、著名人の住所を教えて頂き、賛同人をつどり東京で活動を始めたのです。その1カ月後に、運動を宮崎に持ってきて、代表は父の知り合いでもあった上野登さんという先生にお願いしました。綾の前田町長にも、鉄塔の事は出さないことを前提に、賛同して貰いました。この約束は本当に守りました。そして2カ月ちょっとで15万の署名を集めて環境省に持っていきました。ところが、新聞に「世界遺産運動は鉄塔反対運動である」という記事が出たのです。他の仲間は大丈夫と言ってくれましたが、宮崎に帰ったら何事もなかったように活動が沈下していたのです。本当にマスコミ、メディアの力はすごいです。

でも、それでも私、あきらめません。自然遺産がだめだったら、今度は綾に森と椎葉の文化を合わせて複合型の世界遺産にしようと思っています。それで、椎葉の人に電話したのです。そうしたら、その人が電話の向こうで「綾と椎葉はつくづく縁が深い

ですね」と言われるのです。父が町長をしているころ、椎葉の助役をしていた方で、「あなた、あの国定公園になる時、あなたのお父さん、それはしつこかったのよ」と。

質問：そのときに？

郷田：九州中央山地国定公園となるときに、綾は無理だとみんなが言っていたそうです。それでも父は「仲間に綾を入れてもらえんか。綾もいと、椎葉から言ってもらえんやろうか」とお願いされ、頼んだのが当時のことだったそうです。

「今度は娘のあんたが、世界遺産をしようって言ってきた。つくづく縁が深いね」と言われました。私は父がなんで人工的な吊り橋をつくったかが、ずっとわからなくて許せませんでした。でも自分が世界遺産運動をしたとき、「ああ、父がしたのは同じことだったな。これだったのだな」というのがすごくよくわかりました。知ってもらうことが何より大切だということです。

知床が世界遺産になったときに、全国の候補の中から、最後の5カ所を残して新聞に載せるということになったのです。それに綾は入っており、会議の中でも綾の意見がたくさん出ていました。でも新聞に載ったのは、知床、琉球、小笠原の3つだけでした。あとの2つは載らなかった。1週間後に鉄塔予定地が九電に売却されました。ただ、逆縁の恩というのがあると思います。

反対活動に参加してくれなかった人が、鉄塔が建ったら、「あんな大きな鉄塔やったら、反対やった」と言ってきました。鉄塔が建ったことを、綾の中で、よかったと思う人は少なくともいないと思います。だから、それがきっかけで、自分たちの山は自分たちで守らないといけないという郷土愛の火が少しついたかなとは思っています。反対運動は成功しないというのはわかりました

が、やっぱりできてよかったと思います。それで、人々の民意が深まり綾の森の認知度が高まりました。今、国と県と町と自然保護協会と私たちとの5者会議で、100年後の森を今の5倍の広さの照葉樹林にするという運動が起きています。15万の署名を集めるほど愛されている山を、自分たちは意識したという事を国からも言われました。その中で、森づくりを、鉄塔を境に向こうかこっち、という議論が出たときに、当然鉄塔を境にはいけないと私は言いました。鉄塔は建ったけど、負の遺産をそのまま残さないで、それをちゃんと包み込むように森づくりができてきたということのほうで、100年後には絶対にいいわけだから。それを本当に受け入れてくれた国に、私はすごく感謝しています。

今、森づくりにどう係わっているかというところ、反対のときやいろいろなときは地元の人から「あんたの山」と言われていたのです。けど今は、「みんなの山」という意識になり皆さん、かかわり始めています。

質問：郷田さんの考えるリーダーの資質はなんですか？

郷田：リーダーは賢くて何でも出来る人になるっていうのじゃなくてもいいのじゃないかと思っています。足りない分は色々な人が手伝ってくださる。絶対ぶれない留め金という頑固な意志みたいなものは必要だと思います。

今後の活動

質問：今後または今、始められていることがありますか？

郷田：今、実は「綾町が目指したらいいのだらうな」ということをしています。例え



ば、うちに宿泊して、私が森を案内し、お野菜料理を中心とした料理を食べさせながら、体と心を癒やすという、本当の意味でのセラピーをしています。その考えに賛同してくれるお医者さんと一緒に組んで「体と心を癒やす」取り組みをしています。

結果的にそれが1つの見本になっていくだろうなと思っています。それで、私が見せてきたことが、誰かに引き継がれればいいと思います。

長男を亡くしたときには悲しかったですが、私は、私を学ばせるために長男がやってきてくれたと思っています。私は常に「どういう時にでも光の中にいないといけない」といっています。だから、私のキーワードは「命と光」なんです。

断食に来られた方はみんな幸せそうな顔をして帰っていきます。「お野菜の1杯のスープがこんなにありがたいなんて。食べ物をこんなに感謝して食べたことはなかった」と。だから、断食した人が、うちの断食に「幸せ断食、命の食卓」と名前付けました。

あと、私が個人的に関心があるのは認知症のリハビリです。認知症を治すシステムに出会いました。軽度の方は回復がとても早いです。ボランティアで地域のおばあちゃんと1対1でやっています。認知症は海馬というところに問題があるらしく、それを活性化する一番の薬は愛です。共感してあげて、一緒に楽しむ。この運動が、効果があるように思います。

質問：それは医療行為として、認められているのですか？

郷田：認められたらいいと思うのですが、日本はお金に合うか合わないかでしか動いてくれませんか。中国では同じこのシステムを、国で取り上げどんどん広がってい

ます。こちらでも広がるように私なりにがんばってみたいです。

官民の連携

質問：地域での役割、行政との連携はどうですか？

郷田：私は市民運動をしてきた流れがあり行政と一線を引いてきたところがあります。是と否をはっきりさせるポジションもあって良いと思います。しかし、私が動くときに基本は郷土愛だけですから行政と力を合わせて町づくりができることは一生懸命であることをしようと考えています。最近、山づくりに関して協力しあうことも多くなりました。しかし、次の世代の仲間づくりも大切です、第一線を退いて町民の方々の生き活きとした山への参加づくりをすることも必要なことと思います。でも是と否をしっかりとみつめることはしていきます。

質問：他に行政と連携していることはありますか？

郷田：森林セラピー登録やユネスコの世界遺産登録の動きなど、私のネットワークに入った情報は、町にも投げかけるようにしています。

質問：自分の仕入れた情報は早く役場のほうにも投げかける。それが綾のためにもなるということですね。

郷田：そうです。また、今までの人脈を活かして、地域を紹介した入りとか、人材を紹介するなどのこともしています。

質問：今日はお忙しいところ、ありがとうございました。



⑤熊本市都市建設局都市政策部都心活性推進課



【インタビュー対応者】

守田 誠治 課長、大関 司 課長補佐、

田代 尊久 参事、後藤 聡 主任技師

九州新幹線鹿児島ルートの中線開通、政令指定都市への移行を見据え、熊本城を中心とした都心部の賑わいづくりを進めている。中心市街地活性化基本計画、都市再生整備計画等に基づき各種のハード・ソフト事業を展開。民間と協働して各種まちづくり施策を実施中。

『連絡先』

熊本市都市建設局都市政策部 都心活性推進課

〒860-8601 熊本県熊本市手取本町1番1号

TEL 096-328-2537 FAX 096-359-6978

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

九州新幹線全線開業や政令指定都市への移行を見据え、中心市街地の活性化に取り組む。市と地域が協働で策定したまちづくり計画書に基づいた取組みを進めることで活性化を目指す。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 中心市街地の回遊性向上を図るため、JR 熊本駅と熊本城・アーケード街の間に位置する新町・古町地区において官民協働のまちづくりを推進
- 来街者の増加を図るには、地域資源に磨きをかけ、その魅力を情報発信する取組みも必要

活動の効果、成果

- 地域が主体となったまちの活性化に向けた取組みは進む

活動を持続的に行う秘訣

- 活動を行うためにはスピード感を持ったスキームが必要

今後の活動

- 中活や都市再生整備計画に位置づけられた市が主導の事業は、計画に基づいて推進
- 新町・古町地区において、官民協働のまちづくりを更に推進

きっかけ、地域が抱えていた課題

質問：中心市街地活性化基本計画などを策定したきっかけなどを教えてください。

市：郊外型大型店の出店を主な要因として、中心市街地の歩行者通行量は減少傾向にありました。歩行者通行の量は毎年8月に測定をしているのですが、一時期の3割減といった状況になっています。また一昨年、熊本城400周年のイベントで日本一の入場者数を記録しましたが、なかなかその効果が中心市街地に波及していない状況にありました。

活動状況

質問：今の活動について教えてください。

市：熊本市は、平成23年3月12日に迫った九州新幹線鹿児島ルートの特急開業を控え、さらに、平成24年4月には全国で20番目の政令指定都市移行を目指しており、まさに将来に向けたまちづくりを、喫緊の課題として取り組んでいるところです。このような中、本市のシンボルである熊本城を中心とした熊本城地区、商業・業務機能が集積する通町・桜町周辺地区、陸の玄関口である熊本駅周辺地区、それらの間に位置する新町・古町地区の4エリアを中心市街地と定め、その賑わいづくりに取り組んでいるところです。

特に、西南戦争以降復興された440軒余りの町屋など城下町風情が色濃く残る新町・古町地区では、官民協働で策定した「熊本駅都心間（新町・古町地区）協働のまちづくり計画書（平成17年8月）」に24事業が位置づけられ、これらを推進するため、平成20年度に「熊本駅都心間協働のまちづくり推進制度」を創設しました。

計画策定から4年後の平成21年度には、まちづくり計画書を総括するため、学識経験者、地域、行政をメンバーとする懇談会を設置し、今後、地域と市が協働して推進する7事業を決め、取り組んでいるところです。

質問：今後の予定は？

市：7事業のうち、特に城下町風情を創出するために欠かせない「街並みルールづくり」と「町屋研究」の2事業については、担当課において、平成23年度、町並みガイドラインの策定のためのワークショップや、町屋認定制度の創設に向けた調査を実施することとなっております。併せて、当課においては町屋の活用方策を検討するため、ワークショップや実証実験を実施する予定です。

質問：今、町屋は空き家になっているものが多いですか？

市：多いですが、大学生が2人でルームシェアして町屋に住み始めたり、町屋で雑貨屋を始められた方がいたり、活用したい方も少なからずいらっしゃるようです。

質問：地域の活動は、どのようなことをしていますか？

市：まちづくり推進制度を活用されて、地域で「城下町和 samon もてなし隊」を組織され、来街者に城下町風情を感じていただけるよう、地元案内人による城下町見どころガイドや名物「辛子蓮根」作りや伝統工芸「肥後象嵌」体験など城下町の食や職文化を体験していただける着地型観光を始められました。【ホームページ：<http://wasamon2010.web.fc2.com/>】



質問：城下町和samonもてなし隊は、自立されていますか？



まち案内の様子

市：計画段階において、まちづくり推進制度を活用され、助走段階では、モニターツアーの広報手段に市政だよりを活用するなど、協働で取組みを進めてきました。

活動の効果、成果

質問：中心市街地の通行量は、いまも下がりぎみですか？

市：今年の8月の金曜日と日曜日の二日間にやったのですが、猛暑で出控えもあったとは思いますが、4～5%は下がっています。

今年の特徴としては、金曜日よりも日曜日のほうが少なかったということがあります。

質問：買い物でも、ぶらっと商店街に来ようかというのが、なかなか無いですからね。このあたりの建物の更新具合、マンションなどは出来ていますか？

市：市街地周辺ではマンションが結構建っていて、人口は伸びてきています。

新町・古町においても、中心部と近いことから、マンション開発が進んだため、マンションと町屋が混在しており、城下町風情が感じられる町並みを形成するため、市

と地域が連携する必要があります。

課題、困っている内容

質問：城下町和samonもてなし隊のメンバーは固定ですか？

市：主要メンバーは固定していますが、最近では、地域で案内人育成のための講座を開かれています。

質問：メンバー（担い手）は増えていますか？

市：地域で活動されている皆さんは、働きながら、時間を作り、「地域をよくしたい、知ってほしい」という想いで活動されています。そういった担い手を発掘するため、案内人育成講座などに組み込まれています。

また、担い手が増えてもお客さんが来ないことには継続が難しいので、どのような魅力ある企画を打ち出すかが課題です。

質問：ツーリストへの売りこみはしていますか？

市：旅行会社には、からし蓮根作り体験など、何度か取り上げてもらっています。また、地元ホテルと宿泊パックでツアーを作り、販売して頂いています。

質問：熊本城のイベントに来られた人は、新町古町やアーケードにはなかなか行かない感じですか？すぐに阿蘇や天草に行き、黒川温泉や由布院で宿泊するという感じですか？

市：お城を見て、「阿蘇や別府など次の観光地に行こう」という行動パターンが多いように感じます。今後は、熊本城のエントランスにあたる桜の馬場にオープンする「城彩苑」などと連携し、熊本城の賑わい

を新町・古町地区やアーケードまで広げていきたいと考えています。

官民の連携

質問：熊本駅都心間協働まちづくり計画書を策定するときには、ワークショップなどでかなり議論をして、熊本市さんも入って検討を進めたのですか？

市：そうです。16年度からワークショップを始めて、17年度に計画を策定しています。協議会を4回、ワークショップを古町が7回、新町が5回開催しています。

質問：「まちづくり推進制度」とは、どんなものですか？

市：A型、B型の事業という2つの制度をつくっています。A型事業は、まちづくり事業の企画立案のための調査研究等の事業への支援として200万円を上限としています。B型事業は、まちづくり事業に必要な施設の整備、物品の配備、イベント等の事業ということで、例えばまち案内に必要な立ち寄り所のトイレの改修などが実施されました。これにつきましては、経費のうちの半分を上限に熊本市が負担しています。

質問：行政と民間のスピード感についてはどうですか？

市：前年度に計画を立てて、次年度実施という行政の手続きでは、民間のスピード感にそぐわないと感じています。民間が熱意を持ち、今やりたいというときに、すぐに支援できるようなスキームが必要ですね。

質問：新町、古町のまちづくり、まちおこしの熱意は昔からありましたか。

市：「一新まちづくりの会」という組織が

NPO法人格をもっています。もともと小学校のPTA活動から始まったとお聞きしたことがあります。現在では地域活動を中心として、まち案内など来街者への“おもてなし”の活動まで取組まれています。

質問：行政は異動があるので、その点でまちづくり団体から不満はありませんか？

市：「この24事業はどうなっているのか」、「役所は定期異動があるので、地域のことをまた一から話さなければいけない」と言われたことがあります。

質問：民間の活動について感じることはありますか？

市：継続するために、ボランティアではなく、収益を上げて、地域でお金が回るように、案内ツアー等を実施していくことが必要と思います。

質問：支援制度の活用状況についてはいかがですか？

市：支援制度を創設して、平成20年度から毎年度予算化していますが、年々執行額は減少しています。実績としては、この3年間でA型が5事業、B型が6事業に活用されています。

質問：本日はお忙しい中、ありがとうございました



⑥古湯・熊の川温泉地活性化運営委員会

やっだひでとし

八田英俊 氏



【八田英俊氏プロフィール】

佐賀県佐賀市富士町生まれ（61歳）
古湯・熊の川温泉地活性化運営委員会 委員長
佐賀市北商工会副会長
菓舗 やっだ屋

【活動団体諸元】

団体名：古湯・熊の川温泉地活性化運営委員会
会 員：商工会、自治会、温泉旅館組合、JTB、JR九州、自治体担当などで構成

【連絡先】

古湯・熊の川温泉地活性化運営委員会（佐賀市経済部商業振興課内）

〒867-0281 佐賀県佐賀市栄町1番1号

TEL：0952-40-7100 FAX：0952-26-6244

E-mail：svogyo@city.saga.lg.jp

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

観光客が減少し地域活力が衰退してきた温泉地において、危機感を持った地域が一体となって地域資源を活かした観光地づくりに取り組む。地域資源を活かした地域自らの身の丈にあった取り組みにより、観光客数が増加に転じる。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 地域の強みである自然環境や歴史・文化、良い泉質を活用。自然と共生した雰囲気作り
- 情報の発信や地域の色々な資源の連携
- ハードよりも地域主体のソフト施策を充実。ハードはソフト施策により必要に応じ整備
- 「まちづくり協定」を締結して景観の統一

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 意思の疎通不足によるサービスへの不満や苦情の発生。接遇の研修などの充実による対応

活動の効果、成果

- 観光客が増加
- それぞれのお店の利益より、地域としての利益を求めるような意識の変化
- 自ら活動に取り組む意識の醸成

活動を持続的に行う秘訣

- 地域が主体となって計画づくりから実践に取り組むことが重要
- 身の丈で出来ることからやることが重要
- 自ら最初実践し地域の理解を得ることが重要

今後の活動

- 現在の活動を継続する。継続する中で色々なアイデアや修正を行っていく
- 地域の環境を将来的にも担保する仕組みを考えていく
- リピーターを確保するための取り組みを重視していく

官民連携の課題と望むこと

- 当初は行政からの「やらされている感」もあったが成果が上がり自分たちが主体となって活動するようになった。富士・三瀬の温泉を核とした活性化は佐賀市の重点施策にもなっているため、連携して頑張っていく。

プロフィール

質問：もともとのお仕事は？

八田：菓子製造業です。

質問：組織の構成員などをお教え下さい。

八田：運営委員会は、商工会、それと古湯・熊の川の自治会の会長、温泉旅館組合、JTB、JR九州、行政の各担当で構成されています。実際の活動は下に部会が3つあり、そこが主に活動しています。

活動状況・きっかけ・課題

質問：それでは、活動全体についてお聞きします。

八田：まずきっかけとして観光客数の減少がありました。平成12年が最高で平成17年まで、ずっと右肩下がりでした。17年度以降、佐賀市に合併し、その頃から各旅館・地域の方も今の状態ではだめなので、どうにかしないといけないと言いながら、それぞれ努力はしていましたが、どうしても方向性が一体化していなかった。それで地域の温泉地活性化運営委員会を立ち上げ、方向性をまず決めようということになりました。

地域づくりの方向性について当初は「きらきら」した感じを目指していました。しかしみんなで地域の強み・弱みを話し合い、それで、熊本県の黒川温泉を目指す事になりました。そこから、黒川温泉を視察し、新明館の後藤哲也先生をお招きして、地域の現状を見ていただいたときに、古湯熊の川には日本の文化が残っていると言われました。そのアドバイスを受け、自分たちのできる範囲はどういう方向がよいかを考え、看板の統一などから活動を始めました。看

板を、書道の高校全国大会で20年以上優勝している佐賀北高校の生徒さんに文字を描いていただいて、それをまず目立つところに貼ることから始めました。その中で各旅館や町の景観も自分たちができる範囲で、統一したイメージになるように進めています。各旅館では、自分で樹木を植栽したりしていますが、今、一番の問題はできることからしていますが、どうしても後継者がいてやりやすいところと、後継者がいなくてどうしようかと悩んでいるところがあります。

それと旅館関係では、まずお客さんをもてなして喜んでいただけるように、料理やサービスなどいろいろな勉強会をしています。また、宿泊プランなども自分たちで立てたりしています。また、おかみさんたちは毎週日曜日に手づくりの朝市として、農家の方と連携し、観光客や地元の人たちに野菜などを販売しながら、自分たちでいろいろな特産品を開発して販売したりする努力をされています。

質問：委員会を立ち上げたのは、危機感からだけですか？

八田：ひとつ合併の効果だと思いますが、佐賀市と合併したときに、佐賀市の観光は三瀬と富士町ということが位置づけられたのも大きかったです。

質問：三瀬との連携はされていますか。

八田：旅館関係でチラシを出すときに、古湯熊の川温泉を利用したら、三瀬にある野菜直売所のマツちゃんは何円引きになりますよという案内とか、三瀬そば街道の紹介などはしています。それと古湯熊の川と三瀬を大きいマップの中でルートの的に説明をしたりしています。また三瀬からはみつせ高原キャンペーンという中に古湯・熊の川

温泉の紹介を入れていただいたりしています。

質問：景観への取り組みはどのようなものですか？

八田：自治会長に各地域で計画を説明して貰い、地域の人に承諾の印鑑をもらっています。そのあとに、温泉街の景観を統一しようということで、まちづくり協定を締結しています。それで、その協定に合わせ、各旅館などが自費で出来る範囲で改修などを行っています。それで、自分たちで作った看板などに合わせ、市の方に植栽や看板などの設置を協力していただいています。

質問：JTBやJRとはどのような関係ですか？

八田：こちらからの情報提供や佐賀駅での情報発信などです。古湯・熊の川温泉でこういうことをしているということがJR、JTBの頭の隅に入ると入らないのでは全然違うと思います。

市：バルーンフェスタという大きな大会のときに、窓口で古湯・熊の川のパンフレットを手渡してもらったり、バルーン会場からランチバスを走らせてお昼を提供したりするプランの提供など、お互いにメリットがあるように協力しています。

質問：委員会と本業の二足の草鞋は大変では？

八田：逆にプラスになります。地域が一定の方向にいきこうという中で、自分は反対ではいけませんし。

活動する中で、いろいろ勉強にもなります。ですから、苦にはなりません。

質問：イベント等もかなり企画していますか？

市：大きいのが4月に行われますマラソン大会。9月に行われます映画祭ですね。映画祭は今度で27回になります。あと富士町ふれあい祭り、旅館組合が主体の佐賀県内で一番早い花火大会をやっています。大きいものとしてはそれくらいです。

質問：映画祭はどのようなものですか？

市：きっかけは、全国的なむらおこしブームの中で、若い人が「温泉に入って映画を見たら最高だね」という発想から手作りではじまりました。手探りの状態で始めましたが、幸い回を重ねるごとにお客さんの数も増え、当初の500人程度から多いときは3000人を超えるようになりました。

うちは当初からお金がないので、基本的に監督、俳優、すべてノーギャラでお願いしています。富士町でしか食べられない料理を提供し、観客と一緒にパーティーをやるので、身近に俳優や監督と一生懸命お話をしながら飲み食いできるので、非常に楽しみにされているお客さんが多いです。無料の温泉も楽しめますし、会場の3分の1は下にマットレスを敷いて、寝転がれるようにしています。アットホームな雰囲気がうけ、全国的にマニアの方には有名です。遠方から毎年おみえになる方も多いです。

質問：スケジュールは23年度までの予定のようですが、ほとんどの事業が順調にいつていますか？

八田：そうですね。ソフトの面においては順調にいつています。

軌道に乗るまでに要した期間

質問：活動は軌道に乗り、うまくまわってきていますか？



八田：採算的にはまだです。2年ぐらいでポンと上がるというのはなかなか難しい。朝市にしろ、おかみさんたちが、忙しい中で自分たちでやっているの、その分だけはいくらかまとまっているような感じです。商売はそんなに甘いものではありません。ただ、継続するということが一番大事だと思います。



質問：市の環境整備などはどうですか？

市：行政は住民、旅館の方と協力して雰囲気をよくしようという気運です。まちづくり協定が結ばれましたので、景観統一に向けて「街なみ環境整備事業」を利用して、住民の方がもっと住みよい町にしよう、古湯・熊の川温泉らしさを守りながら、まちづくりをしていこうと思っています。それで、10年計画で道路の美装化や、看板の整備などを行っています。あと支所の周りの植栽もしています。住民の方、旅館街を散策されるお客さまがまち歩きをしやすいように、道路の整備や、緑化により癒しの空間づくりということで取り組んでいるところです。

力を入れている内容、ポイント

質問：協議会は発足されたのですか？

八田：協議会の発足よりも、部会の形で先に活動しているということです。どうしても協議会が先では、頭でっかちになり、十分に動けない部分もありますので、それよりも部会として若い人が先頭に立ち、私たちがしていきますよと言ったほうが、実行力があります。

あと、富士町には3つの大きな河川がありますが、下水がある程度完備され、水も清らかさを増しています。ホテルも以前より増えていますし、初夏にはカジカがよく鳴くんです。そういう自然と共生したような形で雰囲気作りを考えています。

質問：他に力を入れているポイントはありますか。

八田：NPOさんたちが古場の古民家を改修して、古民家の重要性を宣伝しているところがありますが、その辺とのリンクの仕方は大事だと思います。

田舎にいと当たり前と思って表に出ないことがたくさんあります。自分たち当たり前と思っている物も、発信しただけでは商品開発につながるのではないかと思います。例えば、田舎の集落で出して貰った料理や漬物などが本当においしかった。そういうのはやはり発信していかないとわからないと思います。

自分たちが今していることは、ハードじゃなくてソフトをある程度考えることです。ソフトが進めば、それに合わせるような形で行政がハードを整備するような形になれば良いと思います。自分たちがよく言うのは「自分たちの身の丈でいかんといかんね」ということです。福岡市民の方は、やはりガサガサしたような日常から、癒やしを求めてこられると思います。そのため富士町・三瀬にしても、それをターゲットにして目標をもっていかないと駄目だと思いま

す。

失敗、失敗を克服した方法

質問：失敗や問題などはございましたか？

八田：大きいものではありませんが、意思疎通などの問題で、もてなしが十分にできなかったことがあります。それは小さいことですが、一番大事なことでもあると思います。

質問：それは来た人へのアンケート結果などですか？

八田：その中で、対応が悪かったとか、食事をするときに自分たちが思っていたイメージと違ったとか、入りたいお風呂に入れなかったとかの指摘がありました。それはある程度、ちょっとした対応の仕方でも何とか出来ることですが、それによっては不愉快に思われるかもしれません。それが、一番怖い面でもあります。

質問：もてなしの仕方とかは、フォローアップをかけながら、旅館旅館でやられているのですか？

八田：そうです。

市：八田委員長がおっしゃったとおり、県の地域活性化の補助金を利用して、接遇の先生に来て貰ったり、料理の先生に来てもらったり、旅館さんも自分たちで勉強されるということを月に何回か開いています。

質問：昔よりはそういう意見は減ってきていますか？

八田：減っています。やっぱり、個々で勉強するよりも皆さんと一緒になって、統一的にやった方がいいです。

質問：一昔前はこんなこと、誰もやらなかったですね。

八田：そうですね。そういうことが、一番お金がかからずに、できる範囲でやれることです。

活動の効果、成果

質問：観光客は18、19年と増加しているのですか？

八田：はい。

質問：旅館の方の意識はどうですか？

八田：今までは自分のところのものを売っているだけでしたが、今は、古湯熊の川を売って、それで自分たちの個人を売ろうと、そういう気持ちが芽生え始めているところです。

質問：案内マップは同じ方が作られているのですか？

八田：旅館の若手が部会を作って、自主的にまわって書いています。何かないか、何かないかと自分たちで、地元を探しているような形です。

質問：一般の住民の方の意識は変化がありましたか？

八田：地域の方で公衆の温泉に入られる方が、また増えてきました。福岡市内の早良区や佐賀市内などから、会社が終わって食事をしてお風呂に入るといった人も増えていきます。





持続的に行う秘訣

質問：改修をするときは、まちづくり協定のデザインに沿うことを皆さんの約束事にしているのですね。

八田：やっぱり、それに携わっている人たちがデモンストレーションとして、まちなみ景観の基本を見せていかないと、住民の人も気づきません。

質問：景観は、専門家の支援をいただいていますか？

八田：黒川を手本にしたり、自分たちで視察をしたりして考えました。

市：黒川の方を担当されたコンサルタントに、古湯熊の川のまちづくり協定運営委員会という基準を決めていく会の中に入ってもらい、資料や考え方を教えてもらいながら、みんなで話し合っ、いろいろ基準を決めてきているところです。

八田：パンフレットに「生命やしなう源づくり」とありますが、自分たちが地元を見つめ直してみようということから始めました。地域の強みとか、弱みとかを整理しながら、弱みを取り外し、強みを伸ばすにはどうすればよいかを、みんなで考えていき

ました。

質問：自費で改修をするは大変ですね。

八田：そうです。自分もこういう立場ですので、何かしないといけない思い、自分で簀の子を買ってきたり、ベニヤを買ってきて真っ黒に塗って取り付けたりました。よく、こういうものに森林組合を抱き込み、木切れを分けてもらい作ったらどうかという話もしています。

質問：間伐材など森林組合は持っているでしょうからね。

八田：後継者がいなくても、玄関の横に板を貼り付けて黒くするとか、簡単にできることであれば可能で、そうすれば雰囲気は変わります。

質問：できるところからやろうというところですね。

八田：そうですね。

課題、困っている内容

質問：後継者がいないところでは、新たな設備投資にちょっと躊躇するようなところもありますか？

八田：1軒、後継者がいないところがありました。そこもリニューアルされました。旅館は12~13軒ありますが、皆さんこれじゃいかんというのは、分かっています。私も外から見て、旅館もまとまってきたなという雰囲気を感じます。

質問：昔は個々の旅館で、という感じだったのですか？

八田：そうですね。でもやっぱりみんなで支えて増やそうという意識に変わってきています。

質問：宿泊より立ち寄りが増えている感じですか？

八田：そうですね。立ち寄りはある程度、日を問いませんが、宿泊は週の月曜、火曜、水曜ぐらいが一番少ない。そのへんの曜日的な偏りをどうするかというのが、今からの課題だと思います。

市：旅館の皆さんに話を聞いても、立ち寄りの方をどうやって宿泊につなげていくのかというのを、みなさん考えているようです。

質問：今の段階で課題と思っていることがありますか？

八田：当面は自分たちがやっていることが正しい方向だと思ってやっています。ただ、皆さん個性があるし、ものを建てるにしても、「おれの勝手じゃないか」と言われてしまうこともあるかもしれません。それが一番怖いし、そのへんの全体的なまちづくりの中での連携が大事だと思います。

今後の活動

質問：景観条例などはないのですか？

八田：地元の人だけなら要らないと思いますが、怖いのは外から資本が入ってきたときで、それに対しては、ある程度の規制の網は必要と思います。

質問：景観計画についてはどうですか？

市：景観条例は罰則もあり制約も増えるため、全員に説明し理解を取らねばならず、今の状態ではまだちょっと早いと思います。もう少し皆さんの機運が盛り上がってくれば、そういう流れになっていくと思います。

国道が整備され、まちなかの道路が、霧

囲気のいい、まち歩きができるような安全な道路になってくれば、景観の話も盛り上がるんじゃないかなと思っています。

質問：お客さんのターゲットは、福岡市ですか？

八田：そうですね。佐賀県全体で80万ですが福岡市で100万人いますから。それで、旅館関係の大体7割ぐらいが福岡です。イベントの案内も福岡に出すことが多く、福岡の人は古湯温泉をよく知っています。ちょうど古湯熊の川というのは、この北部九州の真ん中ぐらいになるわけです。福岡市、唐津市、長崎、熊本ぐらいからも、アクセスが出来ます。

質問：宣伝やキャンペーンは福岡でよくしていますか？

八田：積極的ではないですが、「じゃらん」などを使ったりしています。

質問：狙いとしては団体客ではなく、個人客のリピーターを増やしたいということですか？

八田：痛しかゆしですが、時代的に大きなバスでボンボン来るような時代は終わっています。施設的にも、大人数の対応はしきれないと思います。そうしたら、狙いは少人数の方、家族連れ、友達2、3人ですね。それとリピーターをどうするかです。何回でも来ていただくには個々の努力も必要ですが、周囲のサポートも大切です。サポートとしては、道路のアクセスをやすくするようなことも重要で、そのためには案内看板を行政にお願いしないといけないと思います。



質問：それは行政側と連携し、お客さんに迷わせないように来ていただくようにということですね。

八田：あとは外国の方への対応も、ある程度考えていくべきだということで、案内の中に韓国語、中国語を入れたと思っています。

官民の連携

質問：官民の連携についてご意見がございましたか？

八田：富士町単独のときは産業としては農林業が主体でした。佐賀市になったときに観光は富士町と三瀬という取り組みですので、自分たちはよその合併した町村よりも恩恵があるなと思っています。それに報いるためにも、やはり自分たちで立ち上げてやっていかないとということです。あと、支所の存続も、住民がパワーを付けていけば残していけるのではないかと思います。

市：地域の特性を活かした振興策という市長の考えもありますし、地域の特性を活かすためには、地域に密着していないと施策的にも難しい面もあります。1つは佐賀市の重点施策として北部山間地域の温泉を核とした地域振興策というのを掲げているので、合併後の佐賀市としても温泉地の活性化には力を入れております。そういった面では、旧富士町単独では資金的な面も含めて、出来なかったことが出来ているのではないかと思います。

あと、活性化の活動は、手法とか、そういったものに慣れていなかったということもあり、当初は行政にやらされている感というのがたぶんにあったと思います。

質問：行政主導っぽくなっていたということですね。

市：ですが、最近では成果が目に見えてきたし、手ごたえも恐らく感じられるようになったと思います。そこから感じるのは、意識が徐々に変わってこられたのじゃないかということです。

マップの作成をはじめ、次は何をやってやろうか、次は何を仕掛けてやろうかなど、積極的に自分たちが自主的に行動をされる雰囲気になってきたというのを感じます。

当初は嫌々ながら、そこまでは言いませんが、やらされている感が十分あったのじゃないかなというのがありますけども、ここ最近ではやればやった分自分たちに返ってくるのがわかり、そのことが喜びや楽しみとなって、ますます前向きな意欲が感じられますし、やはり継続的に続けることが必要かなという気がします。

質問：他に行政への要望等ございますか？

八田：ひとつ自分たちが一番気になったのは、今回ダムがあそこにできまして、警報機が作られています、色が真っ赤なので。黒字に白でシックにまとめようとしている中で、あれがポン、ポン、ポンとあると違和感があります。北山ダムのほうは緑に統一されています。その辺もできればある程度こちらに合わせたような形に出来れば一番よかったなと思います。

質問：それでは本日のインタビューはこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。



⑦NPO 法人さかのせきまちづくり協議会 専務理事 おかもとときしちろう 岡本喜七郎 氏
 NPO 法人さかのせきまちづくり協議会 理事長 わたなべおさむ 渡辺修 氏



写真向かって左側から渡辺氏、岡本氏

【岡本喜七郎氏プロフィール】

大分県大分市佐賀関町生まれ（67歳）
 NPO 法人さかのせきまちづくり協議会専務理事（専業）
 元漁協職員

【活動団体諸元】

団体名：NPO 法人さかのせきまちづくり協議会
 会 員：個人は少なく、主に佐賀関町の企業・団体で構成。日鉦の
 関連会社や商工会議所、漁協、農協、自治委員など

『連絡先』

NPO 法人さかのせきまちづくり協議会
 〒879-2201 大分市大字佐賀関 966 番地の 5
 TEL：097-575-2000

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

地域活力を担うお祭りなどのイベントを開催する事務局の受け皿組織として設立され、地域の活力向上や歴史文化の継承などを旨とした活動を続ける。今後は道の駅の経営(NPO)などにより自主財源を増やし、地域活性化のための活動の継続を目指す。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 地域が元気になり、住民が希望を持てる活動を行う
- 地産地消を推進し、収益を地域へ還元することを目指す
- NPO「さかのせきまちづくり協議会」による運営

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 住民の賛助会員が増えないのが課題。活動をとおり NPO の役割や必要性を認識して貰うことが必要
- NPO が住民をリードしてイベントを開催することは大変。そのためにリーダーシップのあるリーダーが必要

活動の効果、成果

- 地域に NPO の活動は徐々に浸透してきていて、感謝もされるようになった
- 自主財源となる事業(道の駅)の継続も見通しが立ってきた
- 「地域おこし」として高齢者からツバキの実を買い取りツバキ油の聖像・販売を行っている。

活動を持続的に行う秘訣

- ‘地域を元気にしたい’、‘地域の歴史・文化を守り、子供達に伝えていきたい’という思いが必要

今後の活動

- 地域を元気にする現在の活動を継続する
- 補助金だけに頼らない、自主財源を増やすような事業に取り組む
- 高齢者の福祉活動なども受け皿組織があれば連携して実施
- 今後の活動の担い手として若い人の育成が必要

官民連携の課題と望むこと

- 運営資金が課題であり、資金的な支援

プロフィール

質問：お歳とご職業をお教え下さい。

岡本：年齢は67歳です。職業は、今は定年して、その前は大分県漁協佐賀関支店に勤めていました。

質問：組織の会員数についてお教え下さい。

岡本：個人の会員数は把握していません。団体が多いですね。団体は、日鉦さんとか、日鉦さんの下請が多いです。それと、各種団体では大分商工会議所佐賀関支所、それから漁協、農協さん、そういうところ。それと佐賀関の自治委員さん、地区の代表者などです。

現在の活動状況

質問：現在の活動状況をお聞かせ願えますか？

岡本：毎月第3土曜日に佐賀関の水産物や農産物を中心に扱う「佐賀関の朝市」をやっています。それと「関あじ・関さばまつり」を例年2月の第3土曜日、「佐賀関ふるさとまつり」を11月の第1土日の2日間、「関の鯛つりおどり大会」を9月の第2土曜日にやっています。それが主な事業で、その他には今年初めて地域資源を生かした活性化事業で、ツバキ油を絞るということをしています。それと地域の町並み整備事業です。特に今年は坂本龍馬のブームで、佐賀関には坂本龍馬と勝海舟がこの港に船をつけて、そこを上がって宿泊し、そこから長崎のほうに行ったという宿（徳応寺）がありますので、それを案内する佐賀関観光ボランティアガイド事業ということをしています。あと、当初は高齢者等の支援事業もしていました。ボランティアで「うず

しおの会」という組織があり、その人達が毎週木曜日に独り住まいのところに電話をかけて安否確認をすとか、そういう事業もやっていました。去年、その団体がなくなったものですから、今は継続していません。

質問：主な活動は、イベント、地域の物産開発、観光案内、あとは街並み環境の整備などですね。

岡本：それと新しく今年12月5日にオープンした「道の駅 佐賀関」(http://www.qsr.mlit.go.jp/n-michi/michi_no_eki/kobetu/saganoseki/saganoseki.html)です。これは非営利活動事業ではなく、その他の事業です。そこで上がる収益を、先ほどの事業の負担部分に使っていくということになります。

質問：岡本様は、NPOの専業でいろいろな活動をされているということですね？

岡本：事務局です。専業はもう一人いて二人でやっています。

質問：いろいろな活動をされる際には、地域のボランティアなどもよく集まっていますか？

岡本：いや、それがあまりよく集まりません。このNPOを立ち上げた経過というのがありますので。

きっかけ、地域が抱えていた課題

質問：立ち上げの経緯をお聞かせ下さい。

岡本：佐賀関町では、イベント事業は行政主導でやっていたが、大分市と佐賀関町が平成17年1月1日に合併するにあたって、その協議の中で、大分市としてはいくらかの補助金は出すが、行政主導ではや

れませんとのことでした。

それで、地域行事の主体及び補助金の受け入れ先として平成 16 年に当時の商工会議所会長が、地域の企業・団体・人を集めて、佐賀関地域振興協議会を立ち上げたのがきっかけです。

行政は地域の行事に手を出さない、誰もリーダーとして引っ張っていかない、となると地域行事がなくなり、町自体が暗く将来に希望がもてないようになるのではないか、ということをお心配し、みんなを集めて事業を始めたのがきっかけです。

それで活動を始めたのですが、法人格をもたない佐賀関地域振興協議会という任意団体ではいろいろな不都合が生じてきました。法人でないと信用がない、商工会議所の事務局が兼務で専任の事務局がないと組織としてのまとまりがない、脆弱である、ということから事務局の整備も必要だろうということになりました。そこで平成 18 年に NPO の認可申請をして「NPO さがのせきまちづくり協議会」を立ち上げました。

NPO の設立主旨は、「個人とか、企業とか、団体を問わず、佐賀関地域の住民総参加型の地域づくりをしていこう」、「地域の伝統文化の継承や地域産業の振興など活力を創出する組織をつくろう」、「住民主体によるコミュニティ活動活性化など、新たな地域活動を企画支援する組織をつくろう」、「専従の事務局を設置して、会費等の自主財源の比率を高めて、持続可能な組織にしよう」という 4 つです。

お祭りなどは町の行事をそのまま引き継いでいますので、それについては軌道に乗っています。

ただ、例えば「鯛つりおどり大会」は昭和 55 年ぐらいから始めてもう 30 回になりますが、当初、それぞれの地域、地区から

1500～1600 人ぐらいの踊り手が出ていたのが、今は少なくなって 1000 人をきるぐらいの人数になってきています。

質問：それは若い人が少なくなったということですか？

岡本：佐賀関自体の高齢化が進んでいます。出る踊り子もそうですが、観覧する人も以前よりもだんだん減少傾向にあります。地域が元気になってもらいたい、地域が活力を生んでももらいたい、みんなが出る事によって、それでまたその周辺にお店が出て、ものを買ったり、食べたり、そのような空間が出来ると思って活動をしてはいますが、佐賀関としては減少傾向、下降気味です。

質問：佐賀関の人口自体も大分減っているのですか？

岡本：今は 1 万人ぐらいです。一番多いときは 2 万 5000～6000 人はいたと思います。今は子供が周辺まで含めても 148 人しかいません。子供や若い人がいないと、いろいろな活動をして、なかなか活性化しません。

軌道に乗るまでに要した期間

質問：NPO としての活動は、軌道に乗っていますか？

岡本：やり方などは軌道に乗っていますが、これから先、継続してやれるかが課題です。それは県や市の補助金減額の問題です。

力を入れている内容、ポイント

質問：活動のポイントは地域全体が元気になってもらう活動をしているということですか？



岡本：そうです。地域活性化のためです。

会員が増え、自主財源が増えれば、いろいろできると思いますが、事務所を維持するだけでも費用がかかります。イベントの際には協賛金を企業や団体をお願いしに行きますが、景気も厳しくだんだん、金額が減っています。そうなると、事業を小さくしていけないといけなくなります。また補助金もふるさとまつりは、200 万の予算の



うち県からの 100 万が削減されました。

他に財源がたくさんあればいいですがありません。200 万の予算の中でいきなり 100 万がなくなると事業の継続自体が難しくなります。

発足当時、財源はありました。ところが補助金は削減されてゆき、イベントはそのまま。それで、財源が底をつくようになってきました。

その時に、県がたまたま、ハゼの実とツバキをすれば、ある程度の収入になるのではないかという案を出し、ツバキ油を始めました。実際やると、ツバキの実を取って搾れば油になる、そのストーリーは簡単ですが、相当苦労しました。

質問：油を搾れるぐらいになるまでがということですか。

渡辺：毛虫にやられて手がはれて、熱も出るから病院に通いました。「お父さん、少し

あきらめたらどうか」といわれましたが「乗った船で帰るわけにいかんのだ」ということで続けました。今のところ、何とか順調よく進んではきています。ツバキの実を大体 1 キロ 500 円で買うのですが、地域のお年寄りが拾って持ってきます。これはお年寄りの運動にもなるし、それを楽しみにして、1 つでも 2 つでも拾ってくる。だから、これはいい方向に行っていると思います。

これも 1 つの地域おこしだと思っています。

質問：道の駅の商品は個人が持ってきて販売しているのですね。

渡辺：そうすると、いろいろな角度で相乗効果もあります。農家もそれがお金になり、それが我々にも返ってくる。そういうことで地産地消を特に優先的に N P O でやろうと思っています。地域に無い商品は別から仕入れますが、一番の優先は地産地消です。地元を優先します。

岡本：道の駅で収益をあげると言うこともありますが、そこを佐賀関の前線基地として、そこでパンフレットをおいて、情報を流し、例えば関さばを食べたい人が町の中に入ってくるようになるといいと思います。



質問：情報発信では、道の駅の他にインタ

一ネットとかではホームページですか？

岡本：そうですね。

質問：あとはイベント等の時にはパンフレットとか、チラシなども作っているということですね。

岡本：はい。

質問：マスコミに「こういうのをやりますから」という情報提供というのもしていますか？

岡本：大分合同新聞の記者がしょっちゅう来ますので、そのときに「こういうものをやるから」と話をすると、新聞上に乗せて貰えます。

渡辺：あとはテレビ局がTOS、OBSなどです。

岡本：行事案内を出してくれます。

失敗、失敗を克服した方法

質問：活動資金への援助についてはどうですか？

岡本：県からの補助金がなくなりました。合併で5年間は支援しますので、その間に自立できる体制をつくってくださいということでした。それで我々は自治委員さんを通して4500戸ぐらい佐賀県住民に、賛助会員でいいですから、金額も下げていいので、入ってくださいとお願いしたのですが、なかなか入ってもらえませんでした。

今の人は入るとしたら、便利とか、利益とか、そういうものがないと難しいと思います。

NPOさかのせきまちづくり協議会が、イベントをやっているというのが認知されつつあるのは最近だと思います。まだ行政

がやっているだろうと思っている人もいます。

質問：なかなか全員に浸透しないということですね。

岡本：みんなに知ってもらう方法があればと思います。知ってもらって、会員になってもらえればいいと思います。

質問：住民のイベントへの協力はありますか？

岡本：住民は、行政がやると、わりとついできます。

NPOは民間ですから、なかなかついてきません。理事長が、強いリーダーシップで引っ張って、やっというろいろなイベントが出来ています。強いリーダーシップを発揮しないとイベント事業はできないと思います。

質問：資金面以外で失敗などはありますか？

岡本：それは今のところはないですね。

渡辺：参加する方に補助を少しでもあげたいというのはありますが、これはなかなか難しいです。

この事業をして失敗とかいうのは、今はないです。むしろ地域住民から喜ばれています。

活動の効果、成果

質問：地域住民には徐々に浸透し、喜ばれるようになってきているということですね。

渡辺：そうです。今まではNPOがどういう団体か、よく理解していなかったみたいですね。

質問：道の駅についてはいかがですか？



渡辺：財源がないのに、お祭りなどのイベントで出す事が多いです。これを何とかしないといけないということで、道の駅の公募に手を挙げました。

ただ、NPOは財源がないため、銀行からお金を借りるのも苦勞し、理事の2、3人が保証人になって事業を進めました。この事業は、今のところうまくいくのではないかと考えています。

岡本：道の駅は、ものをあそこで売ってもらうことによって、地域に跳ね返りがありますからね。

渡辺：地域を優先して地産地消を進める中で、そこで上がった収益については、イベントなどで地域に還元しようということです。

持続的に行う秘訣

質問：いろいろと苦しいことはあったと思いますが、今まで続けられたのは、「地域を元気にしたいという思い」からですか？

渡辺：そうですね。やはり、地域への思いです。先人たちが築いてきた歴史を我々が守って、後世につなげるという考えをもたないといけません。

これを今の若い人に急にやれと言っても、なかなかできるものではありません。先輩諸氏が段階的に教育していくことをここでやれば、自ら立ち上がってくると思います。地域の小学校・中学校の子供の教育が大事です。

質問：現実的なところでは、収益のバランスですか？

岡本：活動資金が乏しいですね

質問：それをどうやって確保していくのか

が、必要だということですね。

岡本：行政との協働といっても、行政が「しなさい、しなさい」と言うだけでは難しい。

活動する資金が伴った形にして欲しいです。

渡辺：活動をやめることは簡単ですが、再開するのは大変です。3年か5年に1回ということも考えてみました。ところが、我々の人生の物差しを見たときに、そう長くはありません。ですから一日一日が歴史を刻む歩む道じゃないかということで、先人がつくった歴史は現状維持だけでも頑張っていこうと思いつけています。

課題、困っている内容

質問：活動を進める上での課題はなんですか？

岡本：一番困っている内容は、活動資金がないことです。それで活動資金がないから、やっぱり資金を生むようなことを考えていかないと厳しいなということで、道の駅の公募に手を挙げ事業を始めました。道の駅さがのせきが「NPOさがのせきまちづくり」の今後を占っているようなものです。

質問：中に入っているテナント等は、会員の方ですか？

岡本：そうです。それはここの賛助会員になってもらうことが、条件となっています。

質問：ここがうまくいけば、持続的にやっていく目安がつくということですね。

岡本：はい。そうしないと、来年は運営自体が厳しくなります。道の駅の収益が上げれば、いろいろなイベントにも使えます。

理事長の考え方は、地域の活性化のために道の駅をやっていこうということです。

渡辺：少子高齢化で人口も減少し、これ以

上賛助会員が増えるのは、難しいと思います。

それで、じゃあみんなで汗をかいて、収益をあげ地域に還元しようという目的をもって始めました。全国でも道の駅をNPOが経営しているというのはあまりないと思います。

今、ここの住民が、何をしなければいけないのかを考えると、先人がつくった歴史を残し、もう一度活力あるまちにしていけないといけないと思います。そうしないと人口減少の歯止めは出来ないと思います。これを楽しみに私は日夜頑張っています。

今後の活動

質問：今後の活動は、基本的に今やられているイベントの事業を続けていくということですか？

岡本：そうです。

質問：高齢者の福祉事業についても、資金的な問題もありますが、復活させたいというお気持ちはあるということですね。

岡本：担当するような受け皿があればです。

官民の連携

質問：最後に官民の連携について、望むものは資金的な支援ですか？

岡本：そうですね、それが大きいですね。若い人も少なくなり、何をやるにもお金が必要です。

質問：イベントのときに、人的な支援はありませんか？

渡辺：ないことはありません。要請をすれば1人か2人は来るとは思いますが、支所も人

数が限られていますので大変だと思います。

岡本：土日は出せばその人たちに手当てが必要になるので、あまり出したがりません。

その他

質問：今後、活動を担う人はいますか？

岡本：若い人がいないですね。

そうは言っても今後担う人を育成するように、方法を考えていかないといけないと思います。

質問：感覚的なところで、観光客はどのくらい来ていますか？

岡本：調べたことはないですが、道の駅をつくるときには、佐賀関の九州フェリー利用する人が年間40万人ぐらいいますので、それを基本に考えました。

質問：いろいろなお祭りは、他の地域から来る人も多いですか？

渡辺：来ます。

岡本：特に関あじ・関さばまつりは、県外のお客が多いです。

質問：活動資金も減る中で、ボランティアのような形で続けるのは大変だと思います。

岡本：理事長は佐賀関の地域に愛着を持っています。持っていなかったら、何もしないとします。それで、今これだけやっているから現状維持が出来ていますが、見放したらもう大変です。

誰もやる人はいないと思います。

渡辺：ハッパはかけているのですが、なかなか見当たりません。

質問：後継者が育たないという感じですか？



か？。

渡辺：いないことはないと思います。私が引けば、どうかなるのかもしれませんが。

今、1つ希望がもてたのは、道の駅に取り組んで、今後これが良い目玉になって育てば、自ずと人材が出てくると思います。

今まではまったく無報酬の中で、お金を負担することだけが多かったのです。実際に頭になると負担することが多いのです。

今度はそういうものを、理事長の業務までは報酬は出せないけれども、必要な出費については交際費のような形で出してあげる仕組みをとっていけば、後を継ぐ人もでてくると思います。

質問：そうですね。今は、働く時間も、お金も全部自腹ということですからね。

渡辺：自腹です。本当にうちは裸一環で立ち上がったNPOです。ツバキ油にしても器具、機材、バケツ1つも持っていません。

質問：皆さん、持ち寄りですか。

渡辺：圧縮する機械だけは買いましたが、あとは全部手持ちでやりました。

先日も専務と2人で竹を切りに行ったときに、そこに空き地があるので、ツバキの苗を植えたのです。「これも後世のために植えときゃ、実なるわな」と。

質問：お忙しい中、貴重なお時間をいただきましてありがとうございました。



⑧九州のムラへ行こう **ようふのぶお 養父信夫 氏**



【養父信夫氏プロフィール】

福岡県宗像市生まれ（48歳）

九州のムラへ行こう 編集長

九州のムラたび応援団 団長

※雑誌の編集長として九州の各地域の情報を発信、および地域づくりのコンサルタントとして、マインドシェアと連携してアドバイザー活動をしている。

「九州のムラたび応援団」としてムラのおかあさん、おばあさんたちとの交流会を開催し、九州のツーリズムについて、全員で議論しながら知恵を出し合う、という場の主催も行っている。

『連絡先』

九州のムラへ行こう 出版室

〒812-0013 福岡県福岡市博多区博多駅東2-5-19 サンライフ第3ビル6階

TEL：092-418-3100 FAX：092-418-3120

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

地域振興のアドバイザーとして、都市と農村・漁村を繋ぐグリーンツーリズムの普及を目指す。地域との協働や人材の派遣、大企業との連携により、持続可能な地域を担う「地域マネジメント法人的な組織」を地域自らが立ち上げることを支援する。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 都市と農村・漁村を繋ぐシステムの構築
- 「旅」と「食」をテーマとした地域の活性化と、持続できる出口の仕組み作り（ムラの生産プロジェクトの活動）
- 地域への人材の派遣、育成
- 地域活性化の受け皿となる組織作り

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 地域独特の複雑な人間関係を踏まえた活動の提案

活動の効果、成果

- 霧島の事例は、活動がテレビでも紹介され盛り上がってきた
- ムラの生業プロジェクトでは、多くの人材を地域に送り込み、新たな展開が起きる
- ムラに来てもらうために大手民間企業との連携により、中山間地の活性化を図るプロジェクトが進む

活動を持続的に行う秘訣

- 組織と経済的にどう回していくかという出口の仕組みが必要

今後の活動

- 地域の人材と若者、よそ者、行政を組み合わせた地域を担う新たな組織作り
- 色々な支援策を活用し、とにかく3年間は活動できる組織を立ち上げる

官民連携の課題と望むこと

- 行政の限界は平等すぎることであり、頑張っている人を引き上げることが必要である。それにより啓発された人が同じモデルでどんどん立ち上がっていく
- 将来を見据えた計画づくりを行政は行い、戦略的に人材育成や活動を充実させていけるように導くことが必要
- 活動を持続するために行政、NPOとの連携が必要

プロフィール

質問：失礼ですがお歳はおいくつですか？

養父：昭和 37 年生まれで、今 48 歳です。職業は「九州のムラへ行こう」の編集長で、もう 1 つが「九州のムラたび応援団」という、まだ任意団体ですが、九州中のグリーンツーリズム、民泊とか、農産加工グループとか、そういう地域の人たちのゆるやかな会の代表をやっています。

活動状況

質問：現在はどのような活動をされていますか？

養父：最初にやったのが、雑誌の編集です。その後、地域活性化もお声掛けを頂くようになり、別の組織で地域の活性化のコンサルをやる組織と一緒に地域活性をやるアドバイザーを始めました。

そのうちに、私はムラを活性化するために「旅」と「食」という 2 つのテーマで地域活性をやっていますが、結局、地域にお金をつくっていくためには、その出口を作らないといけません。地域が一生懸命いいものを作っても、それを買ってくれる出口側をつくらないとお金にはならないし、いいツーリズム商品をつくっても来てくれる仕組みを作っておかないと、お金が落ちてこない。その中で、多くの一般消費者を抱えている都市部の民間企業との連携を考えました。大手企業は地域にとって決して敵ではありません。組み方によっては十分応援団になってくれるのだという考え方のもと、民間企業にムラプロジェクトを仕掛けていきました。

その第一弾が福岡地所グループとの「九

州のムラ市場」です。これはマリノアシティに 200 坪ぐらいの市場を企画し実施しました。そのあとトヨタ自動車と一緒に「Gazoo mura」ということを始めました。トヨタのポータルサイトを Gazoo といいますが、九州の 3 つの地域を決めて、そのムラの人たちに参加していただいて、カーナビと携帯とパソコンを連動させ、「農家民宿をやっているおばちゃんが、日記を書くのと同じようにブログを入れると、そこに位置情報が張り付いて、トヨタの純正カーナビを持っている人であれば、そこまで連れていってくれる」ということを始めました。それをきっかけに全国プロジェクトに立ち上がっています。今は九電グループさんと一緒にムラのポータルサイトを立ち上げようと計画しています。そういう民間企業とのプロジェクトも同時にやり始めています。

その次に見えてきたのは、地域ではコーディネートする組織が脆弱だということです。

地域のおばちゃんたちは、もったいないから加工グループを作るとか、「食」を絡めるなど一生懸命に活動をしていて、そこが地域を活性化する一番の光にはなっていない。ただ、どこもそれ以上に広がっていかない。本当はそこにマーケティング力、企画力、デザイン力、販売力などの力をもった人が絡めば、活動が広がりそこに雇用が発生すると思いました。その中で始めたのが「ムラの生業プロジェクト」です。これは特に中山間地の活性化のために、グリーンツーリズムみたいなものをもう少し基盤強化をして、活用されていない農産物などを利用すれば、数人ぐらいの雇用ができると考えました。また、雇用された人たちがさらにマーケットをネットなどで広げ、販売、デザインなどいろいろなノウハウをも

った都市部の人間が係わってくれば、地域を活性化する糧になります。その組織が、着地型観光というツーリストの受け皿にもなりうるだろうと思いました。そのためにはどうしても人材が必要です。その時に、たまたま農水省さんが「田舎で働き隊！」という都市部の人材を農村に研修生として派遣するための事業を始めるので、その間をとりもつ中間支援団体は、何か企画を出してくれという話がありました。そこで、すぐに「ムラの生業プロジェクト」を提案し、過去3年間で150人を都市部から派遣しています。ただ、あまり高いお金は出せないで、年収200~300万でやれる人となると、おのずと若者か、団塊の世代の人たちになっていきます。先日、観光学部の講演に呼ばれたときは、観光の3要素は「見る」「食べる」「遊ぶ」ということで、食が大きな要素だから食の現場でしばらく働け、働いて見聞きした内容を面接官に伝えた方がよっぽど就職が出来るぞと話しました。

また、団塊世代は、大企業をリストラされた人たちに再就職先を斡旋するリクルートの関連会社があります。そこと一緒に2、3カ月に1回、「田舎暮らしセミナー」というのを僕が仕掛けてやっています。かなり優秀な方が集まってきています。こういうのを定期的にやりながら、地方にどんどん人材を入れています。

「九州のムラたび応援団」は、年に1回交流会をしながら、ムラで頑張っているお母さんたち、おばあさんたちを一堂に集め、九州のツーリズムの課題などを全員で議論をしながら、次に進めるべく知恵を出し合っています。新しく参加した人には、今まで頑張ってきている方と交流することによって、もうちょっと頑張ろうというきっかけづくりにもなっています。去年大分県で

やった時には520人ぐらい集まりました。その前が人吉で、その時も300人ぐらい集まりました。

きっかけ、地域が抱えていた課題

質問：活動をされるきっかけは何ですか？

養父：独立して14年目になりますが、福岡の宗像という農村・漁村で生まれ育ち、父親が宗像大社の神主をしていました。その関係ですべて農村・漁村にかかわる父の姿をずっと見ながらも、若い頃は“田舎は嫌だ”と思っていました。僕は37年生まれなので、僕らの世代はみんな都会に出た世代ですから、高校・大学までは大人しく九州に居ましたけど、東京でリクルートという会社に入って、最初は都会はやっぱりいいなと思いながら過ごしていました。そこで10年ぐらい勤めるうちに、僕は都会にあこがれ農村・漁村にはないものを見出して都会に出たのに、都会の人たちは僕が農村・漁村から来たことに対して、すごくうらやましがっている。それは、一体何だろうと思いました。彼らも自分たちにはないものを農村に求めているし、ムラから出てきた我々も自分たちにはないものを都会に求めている。両者がちゃんと手を取り合える社会になればいいのにと思いました。その中で出会った言葉が「グリーンツーリズム」という言葉でした。これは都会の人が長期で農村・漁村に出向き、その中で癒やされ、子供たちは情操教育にもなるというシステムです。それにより地域経済がうるおい、結果的に国土保全や景観の保全にもつながる。ある意味、理想の社会だなと思いました。

大学の研究者の中では知られていましたが、それをビジネスとしてトータルコーデ



イネートするような組織、会社がなかったということがあり、起業化したのが14年前です。

質問：地域の課題はなんですか？

養父：地域の課題は人材が不足しているところです。その人材は販売力、企画力、デザイン力、この3つを兼ね備えた人が入ると、なんとかムラはまだ戦えると思います。ムラもあと10年たったら、今のおばちゃん達が加工グループなどを作って、頑張っているモデルが使えなくなるぐらい、高齢化で担い手がなくなります。加工グループなどはあと10年たったら、あるかどうかわかりません。本当はここでもうかる仕組みができれば、新しい組織、後継者ができると思います。それから、特に中山間地の場合は、今までムラを守ってきたのは兼業農家で、その2大兼業は公務員と建設業です。ところがこの2つが厳しくなり、ムラを担えなくなってきています。その中で可能性があるのは、厳しいながらも、まだお金になっていない日々食うものをつくる人たちがいるということで、それをどのようにお金に変えればいいのかというのが、一番思っているところです。

そのため地域の組織を、地域マネジメント法人的なNPO団体等にして運営できる基盤整備を行政サイドでも応援して頂き



たいと思います。

今、各省から地元で雇用して人件費を出せる良い事業が結構出ていますが、トータルコーディネートがない。戦略的に「この人材にこの仕事をさせ3年後にこれぐらいの事業をつくり、雇用ができるようにする」など、本当は行政が組み立て、地域がソフトランニングできるようなやり方が出来るといいと思います。

質問：他にはありますか？

養父：今は観光地も厳しくて、グリーンツーリズムも課題は人が来ないことです。観光地のほうが人は来ます。観光地と農村をつなげることによって、観光地は食の魅力づくりを農村・漁村側の生産者とつながって強化する、グリーンツーリズムは観光地と連携して人を呼び込む、というように弱いところを補完し合うことが必要です。

軌道に乗るまでに要した期間

質問：活動を始めて軌道に乗るまでの時間は？

養父：これは地域によって、変わります。地域リーダーがいるところは比較的早いです。まずは人を見つけないといけません。結局人材です。

質問：なかなか育てるのは難しいですか？

養父：そうですね。

質問：キーマンになる人がいれば、ある程度その人にお任せしていけるということですか？

養父：地元にはないと難しいと思います。いきなりよそ者が入ってやれるほど、地域は甘くない。地域のリーダーは際立ってなくても、よそ者が来たときに、連携でき

る意識と意欲をもった人がいないと難しいと思います。

それは行政でもいいと思います。

力を入れている内容、ポイント

質問：特に力を入れているポイントは何ですか？

養父：行政でも、本当にやる気のある人たちが、どんどん異動して代わっていく。それはちょっともったいないですね。あと、行政側がやる気になっているけど地元が起きないとか、地元がやる気になったときに行政のサポートが利かないとか。本当はそういう意味ではその両方とも、繋げられるNPO的な組織がどんどん立ち上がってくればいいと思います。

そういう中で力を入れている話でいくと、地元の活性化を担う新しい地域マネジメント法人的な組織をどう立ち上げるか、その人材をどうつなげていくかということが、今一番思っていることです。

失敗、失敗を克服した方法

質問：何か失敗はありましたか？

養父：失敗は、地域は人間関係が複雑で、今までの選挙のしらがみとか、人の好き嫌いとか、合併のしこりとか、いろいろなしがらみがあって、最初にどこに話をもっていくのか、「あの人が立つんやったら、わしや、嫌や」と、そんなのだらけじゃないですか。だから、そこもわかった上で仕掛けていくことが必要です。もしくはわかった上で無視していくかです。どちらにしても、わからずやると大概失敗します。

わかった上で、そこを超えようよと言い切れるかどうか。そういうのが十何年やっ

て、すごく感じます。

活動の効果、成果

質問：活動の成果、効果はどうですか？

養父：霧島市の課題は、合併で広域化することにより行政の中の意識がバラバラであるということと、地域づくりをやっている人たちも連携がとれておらず、この2つを繋げる事がミッションでした。そこで、同様に僕は移住・定住の前に、まずは交流の仕組みをつくりましょうと提案しました。

ただ、月に1回のアドバイザーであり、全てはやれないので、何かひとつ、特化できる事例をつくりたいということで、目をつけたのが安楽温泉というひなびた温泉地でした。ここはお湯が最高によく、中に入るとそれぞれが個性的な作りをしている。ただここは昔の湯治場なので食事を出していない。それでお客さんが減少していましたが、泊食分離という考え方もあるのではないかと思いました。そこで周りを見ると、嘉例川弁当という全国区のお弁当がある。そこで、同様に霧島温泉駅に食堂を出しているおばちゃんグループ、加工グループと一緒に、一緒にお弁当を作りました。次に、それを一歩進め「田舎で働き隊！」の若者を10人ぐらい送り込み、ツーリズムの資源調査と新しい弁当づくりを一緒にしました。さらに総務省の事業を使い、1泊2日の「霧島エコ&グリーン・モニターツアー」を企画し、東京から人を呼び、都会の目を見た、地域の素晴らしさを町の人たちに伝えました。そうしたら、テレビ局が来て、最後は「人生の楽園」という番組の取材もきました。弁当作っているおばちゃんたちが取り上げられて、今、すごく盛り上がっています。ところが、次の事業は口

を開けて待っていたのに、結局、次の展開を率先してやる市の体制がとれなくて続きませんでした。ちょっともったいなかったと思います。地元では盛り上がってやっているのに、それをサポートする行政側の体制も変わらないといけないと思います。特に市町村合併になってから、なおさらそうです。

持続的に行う秘訣

質問：活動を持続させる秘訣は？

養父：組織と出口です。出口のところ、いわゆる経済的にどうまわしていけるか。経済的にまわす仕組みがないと、結局は補助金頼りで、交付金頼りで行政さんのその予算がなくなった瞬間に終わることになります。少なくともちゃんとお金がまわるような仕組みをつくるべきだと思います。僕の場合は、食と旅という、ものを売っていくことと、人に来てもらって、ツーリズムにお金が落ちる中で持続的な仕組みをつくらうと思っています。今ツーリズムの世界では、修学旅行の受け入れで民泊型の修学旅行というのがすごく今伸びています。大体1人1万円で1万人入れると1億円の経済効果ということです。ただ季節集約型のところもあり、リピーターにはなり難いのですが、立ち上げていくためには、すごく効果的な取り組みでもあるから、そこもやりながら、物販のところも両方やっていけば、組織としては持続的にやっていけるのかなと思います。そこではそれをマネジメントできる人材が必要になります。最初は年収200~300万の中でもやっていくという人が必要です。

質問：うまくいっている具体的な事例がありますか？

養父：小値^{こぢ}費^ひなんかはそうですね。あそこはよそ者が入ってがんばり、今すごい勢いで伸びてきています。また、全国では、隠岐^{おんぎ}の海士^{あまし}町^{まち}とか人材がどんどん入っているようです。

質問：国と直接やりとりする地域が増えてきている気がします。

養父：これからはどんどん、そうなるのではないですか。一括交付金に変わり、直接地域に行くようになる。ただ、いくら一括交付金になっても、それを受けてやりきれない地域は、そんなになんないと思います。そういう事業モデルになったときに、地元がどれだけやれるかについて、国の方は不安があると思います。予算を用意しても、実際に手を挙げてくれるところがなかったりすることなどです。それで、やれそうなところを、僕のほうで逆にピックアップしながら、全面的に支援して、やれる仕組みをつくっています。

今、本当にやる気のある地域はやれるチャンスなのだけでも、それをやりきれない組織の人がいないですね。行政の中でやろうとしてくれる人は、かなり際立った奇抜な1割くらいの人です。そんな人を見つけてやるしかないでしょうね。

今後の活動

質問：今後についてはいかがですか？

養父：まずムラのおばちゃんたちのパワーをきっかけに、そこに火をつける若者、それをサポートする行政マン、さらにビジネス経験のある団塊の世代のよそ者、そこに新たな組織をつくっていくというのが、僕が今やっている形です。

そこにいろいろな事業をとにかくほうり



込む。とにかくもうほうり込んで、とにかく3年間は行政の予算も使いながら、とにかく立ち上げていくというやり方を、今やっています。

質問：一括交付金などに関して、地域の受け皿の組織に関してはいかがですか？

養父：これから、地域協議会とかがどんどん出てきますよね。そこでお金を渡して任せるときに、地域づくりをやりきれるかということですよ。

質問：行政のほうでも、そこの付き合い方がまだよくわかっていないところがあります。

養父：何でもNPOの協議会だったらいいというわけでもなくて、予算を入れても何に使われたかわかりませんということが、これからどんどん起きて来ると思います。

質問：今後は、国が政策を補助金で体现するよりは、地方が自分たちで考え、国がそれをサポートしていく形になるかもしれませんね。

養父：今までの補助金は事業目的も決まっておき、その組み立ては国が一生懸命やっているの、パッケージ化されているという意味ではマイナスかもしれませんが、うまく使えば効果もわかりやすかった。ところが、どうぞやって下さいとなると、みんなお手上げになると思います。それは結構、危険ですね。本当はやれるところ・団体・NPO・人を、国もわかった上で、事前に「あんた、頼むばい」というふうに、そこまで落とさないで動いていかないとね。

官民の連携

質問：行政との連携はいかがですか？

養父：官民の連携はしています。行政は大事です。昔は独立独歩で地域おこし、村おこしをしてきた世代もいますが、今は行政さんと連携していかないと難しくなっています。本当は民間だけでやれることも、その人の時間的な制約もあるし、そこは行政さんと連携してやっていかないといけないと思います。

ただ、行政の限界もあります。それはあまりに平等すぎることです。頑張っているところを引き上げられない。民間の視点では頑張っているところに、まず立ってもらわないといけない。その人が立ち上がれば、それを見て啓発された人が、同じモデルでどんどん立ち上がっていきます。そう考えれば、行政しかできないことと、行政ではできないことをNPOなりと連携していくと、お互いのプラスマイナスのところを補いながらやれると思います。

行政がやれるところは、予算を引っ張ってくるとか、お墨付きや安心感を与えるという所があります。また、民間が一番苦手な補助金や交付金などの書類は、日々見ている行政じゃないと、普通はできないことです。

中には、補助金は自分が個人で使えると思っている人もいます。目的要件にあつてないとだめよというのを、行政さんがサポートしてあげないと、とんでもないことになります。

あとは、視察とか、情報発信とか、この辺は行政と一緒にやるのが一番いいですね。どこかへ勉強に行きたくても、人材育成とか視察とか、地元だけでは予算も捻出しにくいと思います。特に立ち上げるときなど

はそうです。

そこは行政さんが一応3年目にこういうところを目指して、そのために今ここを学びましょうよとか、こういう人に来てもらいましょうよとか、行きましょうよとか、計画づくりなんかは行政さんがしっかりやっていたきたいと思います。

そして、やるのはやっぱり地元の民間さんが一生懸命やる必要があります。その間になんとか事務局をやれる人材も引っ張ってくる。

私だったら、あとはその人が、そこで暮らしたければ、自分の食いぶちは自分で稼げと言います。そこでは民間の視点でケツをたたかないと、いつまでやっても補助金頼りで立ち上がって行かなくなります。

質問：今日は長い時間ありがとうございました。



⑨合同会社 福岡アーバンラボラトリー

ごとうたいち
後藤太一 氏



【後藤太一氏プロフィール】

1969 年生まれ
合同会社 福岡アーバンラボラトリー 代表社員
米国認定都市計画士
NPO 法人地域経営支援ネットワーク
(ComPus) 理事

【活動団体諸元】

団体名：合同会社福岡アーバンラボラトリー
概要：社員数は6名。企業理念は「福岡の暮らしの質と持続可能性の向上」「日本型地域経営ビジネスと職能の構築」
『連絡先』
合同会社 福岡アーバンラボラトリー
〒810-0041 福岡県福岡市中央区大名 2-2-1MIKI ビル8階
TEL：092-600-8496

【 インタビュー結果のポイント 】

活動の概要

福岡に可能性を感じ、福岡で活動を始め、地域と一緒に「福岡発のまちづくりを世界に展開する」ことを目指し活動を続ける。その活動は福岡だけに留まらず、全国、世界と繋がって広がっている。

活動の中で特に力を入れている内容、及び、活動のポイント

- 成果と成果を柱としたプロセスが重要
- 地域が自分たちの意見や活動で変わって行っている成果を見せることが必要
- オランダ等の交流により「世界のまちづくりの潮流」を理解し活動する。
- 天神の都市再生としてのまちづくり、経済振興で地域の成長戦略を描く実験台として自分たちがモデルとなる。

活動の中での失敗の経験、またその失敗を克服した方法

- 成果が見えるのに時間がかかると信頼が失われ活動への意欲が落ちるため、出来るだけ成果を目に見える形で示すことが必要

活動の効果、成果

- 地域の中で投資などの動きが出始めた
- 活動が全国・海外に知られ、海外との交流や国際化が進んだ
- 地域の意識が、難しい課題にもチャレンジしようというように変化してきた

活動を持続的に行う秘訣

- 小さくても活動の成果を地域に示すことが必要
- 地域へ分かりやすく適確に説明し信頼を得ることが必要
- 問いかけにはすぐに折り返すスピード感が重要で、きめ細やかなやり取りが信頼を生む

今後の活動

- 事業が具体化するように小刻みでも前進していく
- 「世界に福岡から展開する」との思いで、福岡・天神の活動を世界から評価されるようにまとめ上げる

官民連携の課題と望むこと

- 行政は公平性や公共性を大儀に時間がかかりすぎる。スピードアップが必要
- 意思決定の所在を明らかにし、揺るぎないビジョンを訴えるなどのリーダーシップをとるべき
- ものづくり・まちづくりはそれに見合った対価が必要
- 一緒にまちづくりを進めるためにはリスクも共有する必要がある、そのために資金を出すことが必要
- やらないことが最大のリスクで、先の分からない時代だからこそリスクを取ってチャレンジすることが必要

プロフィール

質問：最初に、会社もしくは個人も含めて、どのような活動をやられているのかをお聞かせください。

後藤：会社は、スタッフは全部で6人です。年代は若くて20代半ばから40代前半までです。

全体としては、それぞれに役割分担があって、いろいろな分野の人間がチームとしてやっているという形です。だから私の部下というよりは、後藤と違う持ち味を持ったスタッフがいて、さらに社外の方々と、ネットワークを取りながら一緒にやらせていただいています。

活動状況

質問：現在の活動内容をお聞かせ下さい。

後藤：大きく3つの分野の仕事をしています。

1つ目が、平たく言えばまちづくりで、具体的には天神の都市再生などです。

2つ目が、経済振興で、地域の成長戦略を描くことです。国交省や経産省が合わさった分野に関して、国際会議の事務局をやり、今は地域の産官学民の連携の仕組みをつくらうとしています。

3つ目は、その他ですが、実験台として自分たちがロールモデルになるということが大事だと思っています。それは2つあって、1つは目に見えるものをつくることです。報告書で終わるのではなく目に見えるかたちになるようにするというをやっています。加えて、一企業として、存続するのはもちろん、地域の成長に寄与するために海外の仕事をするべきだと思っていま

すので、海外の仕事をしています。それは、中国の都市開発の手伝いや、オランダの大学と共同の人材育成などをやっています。要は小さいながらも、自分たちが街の一要素・担い手としてやるという意識が必要で、大所高所からだけ物事を言うというような立場になってはいけないという意味です。

質問：オランダのほうと協力した人材育成とは、具体的にどういう取り組みをされているのですか？

後藤：グローバルに通用するまちづくり専門人材の育成です。世界のまちづくりの潮流を勉強した上で、大きな視点から地域の具体的な課題に解決策を作るようになるべきだと思います。そのために、外国の方と一緒に計画を立ててみるというトレーニングが必要だと考えました。それにより、外国の方と連携したり、外国の建築家を呼んだり、外国の企業を誘致したりということがやりやすくなると思えました。

世界では、いいまちづくりをするために、人材とお金の奪い合いをしている中で、限られた福岡の人間の知恵と金だけでやっていたら、それは無理だという認識をまず持つというのが出発点だと思います。

きっかけ、地域が抱えていた課題

質問：活動を始めたきっかけはなんですか？

後藤：都市再生から始めていますが、世界水準では福岡の経済力は高くありません。福岡をもってしても経済活性化が不可欠です。そう考えると、天神地区だけではなく、広域の産業政策や経済政策に踏み込んでいかないと、成果が出ないということで、2つ目の活動に繋がっていきます。



3 つ目は、都市再生であれば、提案をしたら、それを目に見えるかたちにしないと、みんなには理解されないということで、それを具体化しましょうということをやっています。

たとえば天神明治通り街づくり協議会の事務所として、古い建物の一部をコンバージョンし、ガラス張りの目に見える会議室をつくり、そこでやっている活動が外に見えるようにしています。このようにわずかながら、ビルに収入が入っていくというようなことをやっていくことが、大事だと思っています。

天神の都市再生においても、地元だけで会議を何時間やっても限界があって、外の冷静な意見を入れようということで、海外の専門家たちを呼んでみました。その結果、彼らとの1回のイベントで終わらない関係ができ、オランダから協力してくれという話が来たり、天神の活動に興味を持っていた中国のほうでもやってみてくれなにかという話が来たりしてつながっています。

質問：東京で生まれ育った中で、福岡に目をつけたきっかけはなんですか？

後藤：日本にいるか出るかを考えたときに、日本に愛着もあるので、日本で頑張ってみようというのが入り口で、どこがいいかということです。生まれ育った東京では、都市圏人口3000万人のうちの1人に過ぎないので、自分のホームグラウンドという感覚が持てずにいました。ホームグラウンドをちゃんと持ってやりたい、というのが1つです。

同時に、暮らしの質はとても大事だと思っています。日本の中で暮らしの質の高さは、ここがナンバー1だと私は思っています。

3 つ目が、縁があり地域が招いてくださ

ったということが大きいと思います。

福岡に可能性はすごく感じていて、ここで駄目なら、たぶん日本のどこでやっても駄目じゃないかと自分では思っています。

あと、福岡では人の顔が見え、私でもキーパーソンに会えます。それは東京ではなかなか難しいことだと思います。

同時に、福岡が私の背景に見えたことによって、東京の方や海外の方々からも、私に付加価値がついています。東京にいと、いっぱいいるうちの1人ですが、福岡という魅力的な町に何かおもしろいのがいるぞっていう見られ方をするので、逆に東京の方々や海外の方々との関係が、いい意味で強くなったと思います。それは、やはり福岡のおかげだと私は思っています。

軌道に乗るまでに要した期間

質問：どれくらいで活動が軌道に乗りましたか？

後藤：軌道に乗るまでは、何段階かあると思います。乱暴に言うと1つの最初の壁は5年ぐらいです。私がここに来たのが2003年ですから、7年半たって、その間に、よそ者の短期の腰掛けでいるやつというところから始まって、気が付いたら土着になって、それなりに皆さんにご信頼をいただい



て任されるようになるというころまでを考
えていくと、やはり明治通りの協議会の事
務局をある程度任された時が、1つの軌道
に乗るといふところだったと思っています
ので、そういう評価を得るまでに、たぶん
5年ぐらいかかっています。

ステップが何回かあるとは思っていますが、
だいたい3年から5年ぐらいの単位で、
最初はやっぱり長くかかると思います。

力を入れている内容、ポイント

**質問：活動で力を入れている内容はなんで
すか？**

後藤：成果を柱にしたプロセスだと思っ
ています。とにかく主役はコンサルじゃあり
ません。主役は地域の方々であって、彼ら
彼女たちが、自分たちが意見をきちんと言
えて、反映されて、その結果、街が変化し
ているということ、とにかくわかってい
ただくようにしていくことが必要です。私
がお手伝いさせていただいているものは、
天神だったら西鉄さんとか、あるいは会議
で発言してくださる地域の地主の方々、そ
ういった人たちの成果だと、ほんとに思っ
ていますし、そういうふうに見えないと、
逆にいけないと思っています。

失敗、失敗を克服した方法

後藤：反省点は、ちょっと時間がかかり過
ぎて、しばらく成果の実感がないと、皆さ
んが「どうなっているのだ」という不安な
思いになります。そうすると、巻き直すの
に、またマイナスから始まるので、ちょっ
と大変になります。

顔を合わせることは大事ですが、顔を合
わせるだけでは駄目だと思います。皆さん

が、きちんと前に進めようと思われている
と思いますので、それができないときは、
自分の力不足を感じる時もあるし、苦し
い部分もあります。そういうときには、チ
ームで動いているのが幸いで、ほかの方に
代わりに頑張ってもらおうときもあります。
だから全部自分で抱えようとは思っていま
せん。

活動の効果、成果

質問：活動の効果・成果はどうですか？

後藤：効果、成果はこれから出てくるとは
思いますが、現在でも小さいながらも投資
の動きが出てきているのが、成果だと思っ
ています。

それから天神の取り組みは、全国、海外
に知られ始めたかな、という感覚は得てい
ます。

それから、たとえば台湾の先生に呼ばれ
て、台湾の大学で話すとか、オランダのほ
うに評価されて、福岡で実験、人材育成の
実験、プログラムやりたいとか、そういう
話があるってというのは、1つの成果かなと
私は思っています。多少、国際化が進んだ
のだと思います。

地区計画についても課題はありますが、
そういうことをしてみようという覚悟とい
うか意志を、地域のリーダーたちが持った
ということは、大きなことだと思います。
チャレンジすることに価値があって、うま
く行くかわかんないからやめようじゃなく
て、わからない時代だから頑張ってみよう
ということは、やはり一定の成果だと思
います。



持続的に行う秘訣

質問：活動を持続的に行う秘訣はなんですか？

後藤：小さいながらも進んでいるという実感を、皆さんに持っていただかないと、続かないと思います。成果を小さくても見てもらって納得いただくということを一番意識しています。

もう1つは、信頼・信用だと思っています。皆さんに細かい説明をして、全部をご理解いただくとしても難しいものがあります。なので、わかりやすく的確に、ポイントは丁寧に、正直にお話して、そこをご理解いただいたら、あとは細かいところは任せていただくということが必要だと思います。

信頼のもう1つの鍵は、スピードだと思います。投げかけに対して、すぐに折り返すことが必要です。長い時間を取って丁寧にまとめて渡すよりも、とにかく細かいやり取りを多発させるほうがいいと思います。きめ細やかなやり取りが大事で、その先に信頼とかがあるのかなと思います。

課題、困っている内容

質問：活動を進める上での課題は何ですか？

後藤：行政は縦割り横割りという点で、仕方がない部分があることもわかるのですが、それが度を超して悪く働いている面がちょっと気になります。リーダーシップの問題だと思いますので、公共はもっと明確な方向性を示唆していただくと有り難いと思います。それから、意思決定権者が、わかりにくいところがあります。

それと、調整型の積み上げていくやり方

は、外国と繋がったり、企業の経済活動と繋がったまちづくりを考えると遅すぎてどうにもなりません。だから地域が活性化しないと、僕は思っています。

スピードをもっと上げるためには、意思決定の所在を明らかにしてやっていくという作業は、とても大事だと思っています。

もう1つ言うと、縦割り横割りの結果、皆さん自分のことだけを考えて、共通の言葉を持っていないと思います。これは、平たく言うと、みんな視野を広げて勉強しなきゃいけないのじゃないかなと思います。今、世の中何が起きていて、全国、世界のまちづくりの潮流は何で、どういう人が今動いていてとかいうことを、常にわかっている状態で、「今、福岡の街は」という議論をしないと、大きな流れに乗れないと思います。自分の知っている範囲の知識でやろうとすると、すごく無理があると思います。

今後の活動

質問：今後の活動については？

後藤：とにかく小刻みに前進するしかないなので、きちんと肯定的な計画にすることが第一ですね。

それと、具体的な事業化まで到達しないと意味がないと思いますので、そういうものを作っていくのは一番大きいと思っています。

次に、仕組みが重要で、最初の事業ができたあと、2個目が続かないことがよくあります。1個目を作るのと仕組みを考えるのをセットでやらないといけないと思っています。

まちづくり会社を作って、最初の投資のリターンが、次に配分される仕組みを作る

とか、そこまで踏み込んでいかないといけないのかなと思っています。

あと、もうちょっと丁寧にやんなきゃいけないという感想は自分でも持っています。

スピードは大事ですが、1個1個の作業に時間をかけないと質が上がらないというジレンマが同時にあって、これは突き詰めると、工数を集中的に投入するに見合う対価をきちんといただかないと難しいというのは、会社経営者として思います。物づくり、まちづくりは、志だけでは続きません。

日本のまちづくり活動は、それを^{ないがし}蔑ろにしていると思いますし、もっと言うと、行政の発注価格は、安すぎるが多いと思っています。

そういう行政の方々が、何に集中すべきで、何を削るべきかということに対して、うまく判断出来るような、これは集中して投資する価値があると思われるようなものを作るといのが、民間の役割だと思います。

最終的には、福岡を良くするということは当然ですが、そこで止まらずに、何か新しい地域づくりのモデルを世界向けにつくりたいと思っています。

これからは、東京、ロンドン、ニューヨーク、上海だけの時代じゃなくて、福岡ぐらいの大きさの都市が、一番バランスの取れた質の高い暮らしと、変化に富み質の高い雇用、あるいは柔軟な経済産業構造をつくれると僕は信じているので、こういう街が世界に認知され、あのやり方はいいと、あの街は人材を排出していると、そういうふうになりたいと思っています。

官民の連携

質問：官民の連携についてはどうですか？

後藤：官民の連携は、日常的にしています。法制度や規制緩和など行政にしかできないことは多いので、そこはとても有り難いと思っています。

それから、公共事業は、役所の意思決定がとても大事で、官民連携でやるにしても、行政側のリーダーシップがあるべきだと思います。

それから、ビジョンをきちんと訴えていくことは、行政の役割であり民間の提案を行政が認めていくというプロセスは大事だと思います。

そういう意味では、民と官が上手く役割分担をして進めているため、天神地区の官民の連携は、うまく行っているほうだと思います。

連携する上での課題は、役所は公平性、公共性を大義にして必要以上に時間をかけていると思います。スピードアップが必要です。

同時に民間側は、あまりに短期的にものを見すぎるところがあり、もう少し大きい枠組みのなかで個々の事業を見ていただきたいと思っています。

あとは、役所は意思決定を一元化してほしいというのが正直あります。(例：議会と行政)

次に、どんなに小さくてもお金を投資して欲しいということです。人を出します、情報を出しますだけでは、民間から見ると、コミットメントとしては十分に評価はできません。お金を出すということは、一緒にリスクを共有して、その投資に対してきちんと成果を生むために、同じ船に乗るのだと思えますが、助言します、サポートします、応援します、官は応援団です、では駄目で、一緒にリスクをとってやるということがお金を出すことだと思います。

質問：日本の行政の縦割りであるとか、意思決定がちょっと遅いという話がありました、やはり海外はかなり違いますか？

後藤：違うと思いますが、それは、白か黒かじゃなくて、どのレベルかの違いだと思っています。

確かに違いを感じる場所にはありますが、どちらが良い悪いというものでもありません。

また、本質的には似ていると思っていて、アメリカのメトロという僕がいた役所はすごくスピーディだったと思いますけど、それでもやっぱり企業と比べると遅かったです。

だからアメリカか日本かというよりは、行政セクターか、企業セクターかのほうが、その違いは大きいと思います。

ただ大企業同士を比べたら、日本のほうが居心地いいかな、ぬるいかなと思います。それから、小さい企業でいうと、アメリカのほうが小さいところにも分け隔て無くやってくれますから、よりダイナミックに展開しやすいと思います。

だから細かく見ると違いがあるとは思いますが、どっちがいい悪いっていうのを決めきるつもりはなくて、そこでベストを尽くすしかないのかなと思っています。また、民間もいろいろな会社や個人が全くの一枚岩ではないので、その細かいニュアンスには、できるだけ配慮をしたいと思っています。天神は、個人から大企業まで全部入り混じっているところなので、その合意形成では、丁寧にそれぞれの事情を斟酌してやらないといけないなと思っています。

行政には、色々な縦横の割があって、これをつないでいくには、ありきたりですけども、ぶれないビジョンと、誠実なコミュニケーションしかないのかなと思います。

何のためにこれをやっているのかということ揺らがないくらい大きく捉えたほうが、結果うまくいくと思います。

なので、最初は恥ずかしかったですが、「世界に展開する」というのは、今は確信に変わって来ていて、今やっている天神、福岡での活動を世界の方々から評価されるものとしてちゃんとまとめたいと思います。

福岡をよくすることが先にありますが、これは福岡市民だけのためにやっている話ではなくて、全人類のためにやっているという志でやろうっていうのは、本当に真剣に思っています。

質問：日本とかに固執してしまうと、どうしてもちっちゃくなってしまおうという感じが出るわけですね。

後藤：九州、日本、アジアという段階には、あまり意味がないと思っていて、ものをやり遂げていくためには、壁のない時代だということだけは揺らがないようにしたほうがいいと思います。

1万人を切るような町の一集落の話と、今話しているような世界に繋がる話も、僕は同じだと思っていて、大きな考え方はどこに行ってもきっと同じなんじゃないかなと思います。

今までにない時代に突入して、何が起きるか先が読めないわけです。だから分からないことが前提でやらなきゃいけないのに、わかんないからやらないという思考回路に陥りがちで、そこを変えないといけないと思います。行政は、何のミスも許されないと、今までは思っていたところがあると思いますが、そんなことはあり得ない時代だというふうにみんなが変わらないといけないのではないかと思います。

先が読めないで、とにかくミスがあつてはいけないから安全第一で考える傾向が、

特に行政という組織にはあると思いますし、また行政が間違えると民間も批判をする。だけど、リスクがあって失敗するかもしれないけれど、きちんと監視しながら、信じて任せてやっていただきましょうというふうにならないと厳しいですね。

やらないことが実は最大のリスクだっていう発想がいると思います。現状維持イコール衰退の一途です。やらないっていうのと待つっていう意味は違うので、しばらく待とうということはあると思いますが、やっぱり分からないから止めたというのは、どうかなと思います。やる前からやれるかどうか考えて、わかんないから止めたっていうのは止めたほうがいいと思います。

質問：今日は長い時間ありがとうございました。

